家庭雜誌

第四拾六號

◎賢母　蘇峯生
◎支那の落語　思軒居士
◎ゆり子がふる里　湖處子
◎この馬鹿　嵯峨の屋主人
◎ビスマーク夫人　敬亭生
◎村の教師　殘月樓主人

新刊書廣告

松の屋主人編

忠勇美談

全一冊

定價金九錢
郵税申不受
和裝美製本
既刊發賣

今回征清の擧あるに當り我が將士平生忠勇の氣象一時に煥發して芳名千古に傳ふべき者多し松のや主人乃其中に就き精忠高義最欽仰するに足るべき偉績凡そ九項を撰び文の足らざる所は光彩陸離たる錦繪を以て之を補ひ繪の足らざる所は悲壯奔迅の文を以て之を記し以て幼年子弟の龜鑑に供せらるこれ好個修身科の材料なり健全なる家庭用の讀本なり小學校の褒賞用として四季進物として最適當なり偏に大方の愛顧を待つ

西村正三郎序
山田禎三郎著

家庭教育

全一冊

洋裝假綴
二百餘頁
定價金三十錢

曰クルソー曰クロック曰クヘルバルト是レ近時ノ教育家ガ嘖々トシテ稱道スルノ思想家ナリ殊ニロックガ明瞭透徹ナル推論ハ人ニ欣慕艶稱サル、コト甚盛ナリ然レトモ一知半解ノ徒猥ニ之ガ譯述ニ從事シ拙劣ノ文ヲ以テ讀ム者未タ其數葉ヲ終ヘズシテ之ヲ投シテ顧ミザルニ至ル山田氏ガ家庭教育ハ主トシテロックノ思想ヲ祖述シタル者ナレドモ其眼光ノ紙背ニ徹スルヲ待チ之ニ其意見ヲ加ヘ縱横自在ニ論述シタルヲ以テ其文字ニ生氣アリ思想ニ活動アルコト實ニ近時ノ教育社會稀ニアルノ好文字ヲ爲せり日本人ノ眼ヲ以テロックノ思想ヲ窺ハントスル者ハ決シテ此ノ書ヲ欠クヘカラス其家庭教育上ニ有益ナル暗示ヲ與フルコトノ多キニ至リテハ復喋々ヲ要セズ

教育書專賣所
東京市神田區神田
柳原河岸十四號地
普及舍

以上ノ書籍凡テ郵税申受ズ　前金ヲ要ス

◉民友社出版書籍目録◉

○家庭叢書第一巻　家庭の和樂　定價十二錢　郵税二錢

○家庭叢書第二巻　夏の家庭　定價十二錢　郵税二錢

○家庭叢書第三巻　玩具と遊戲　定價十二錢　郵税二錢

○家庭叢書第四巻　家庭教育　定價十二錢　郵税二錢

○家庭叢書第五巻　小兒養育　定價十二錢　郵税二錢

○家庭叢書第六巻　家庭衛生　定價十二錢　郵税二錢

○家庭叢書第七巻　家政整理　定價十二錢　郵税二錢

○家庭叢書第八巻　簡易料理　定價十二錢　郵税二錢

○平民叢書第一巻　十九世紀之大勢　定價十二錢　郵税二錢

○平民叢書第二巻　世界經濟上之變動　定價十二錢　郵税二錢

○平民叢書第三巻　國家と政府　定價十二錢　郵税二錢

○平民叢書第四巻　教育と遺傳　定價十二錢　郵税二錢

○平民叢書第五巻　文明之弊及其救治　定價十二錢　郵税二錢

○平民叢書第六巻 **現時之社會主義** 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第七巻 **經濟と道德** 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第八巻 **歷史之攻究法** 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第九巻 **哲學變遷史** 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第十巻 **白晢人種之前途** 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書號外 **銀貨之過去現在未來** 定價十錢 郵稅二錢

○平民叢書號外 **責任內閣** 定價十錢 郵稅二錢

○十二文豪第十一巻 平田久著 **カーライル** 定價十八錢 郵稅四錢

○十二文豪第十二巻 竹越與三郎著 **マコウレー** 定價十八錢 郵稅四錢

○十二文豪第十三巻 山路彌吉著 **荻生徂徠** 定價十八錢 郵稅四錢

○十二文豪第十四巻 宮崎八百吉著 **ヲルヅヲルス** 定價十八錢 郵稅四錢

○十二文豪第十五巻 高木伊作著 **ゲーテ** 定價十八錢 郵稅四錢

○北村門太郎著 十二文豪第六卷 **エマルソン** 定價十八錢 郵税四錢

○塚越芳太郎著 十二文豪第七卷 **近松門左衛門** 定價十八錢 郵税四錢

○山路彌吉著 十二文豪第八卷 **新井白石** 定價十八錢 郵税四錢

○內田貢著 十二文豪號外 **ジヨンソン** 定價二十錢 郵税四錢

○德富猪一郎著 國民叢書 **人物管見** 定價十五錢 郵税二錢

○德富猪一郎著 國民叢書 **青年と教育** 定價十五錢 郵税四錢

○德富猪一郎著 國民叢書 **靜思餘錄** 定價十五錢 郵税二錢

○德富猪一郎著 國民叢書 **文學斷片** 定價十五錢 郵税四錢

○德富猪一郎著 國民叢書 **天然と人** 定價二十錢 郵税四錢

○第一 **國民小說** 定價十五錢 郵税四錢

○第二 **國民小說** 定價十五錢 郵税六錢

文學博士 元良勇次郎著
○佛國不換紙幣發行始末并信用論　定價十錢　郵税二錢

佛國ブーミー原著 深井英五譯
○英米佛比較憲法論　定價二十錢　郵税四錢

法學博士 本野一郎述
○多數撰擧之弊付矯正策　定價十五錢　郵税二錢

國民之友自第一號至第八號社說及特別寄書
○國民之友第一集　定價二十錢　郵税四錢

國民之友自第十五號至第廿四號社說
○國民之友第三集　定價十五錢　郵税四錢

國民之友自第廿五號至第卅六號社說
○國民之友第四集　定價十八錢　郵税四錢

自第十四號至第廿四號十一冊合本
○國民之友第二卷　定價四十錢

自第卅七號至第五十四號十八冊合本
○國民之友第四卷　定價五十五錢

自第五十五號至第六十八號十三冊合本
○國民之友第五卷　定價五十錢

自第六十九號至第八十六號十八冊合本
○國民之友第六卷　定價六十錢

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

○定價	一冊	金五錢	郵税 金五厘
	半年（十二冊）前金五十錢		地方 金五十六錢
	一年（廿四冊）同金一圓		共 金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人　有馬俊彦
編輯人　塚越芳太郎

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社
（本社電話番號七十番）

明治廿八年一月廿五日發行

家庭雜誌第四拾六號

目錄

社説

露營……久保田米僊畫

料理……一

科學

怪物としての彗星談……三

家政

母と其子……八

(一)話の事

(二)如何なるおもちやを與へんか

(三)長したる小供には如何

遊びの新趣向……一一

智慧の杯

五色鎖

今ドく五色の鎖遊び

卓子とボタンの遊

今日の食膳……一三

紙鍋料理

鰕の三品汁

鳥味噌

美味なる鯛の料理

パン肉

豚の肉絲

手藝叢附……一五

一種の作業卓子

襟巻と手暖袋

染汚拔法補遺

社交一斑……一九

流行の栞……春夢…一九

明治廿七年中の流行傾向

日用品物價……二二

雜錄

紅葉(下)……八荻生 二三

露營……二五

史談

少年のナポレオン(一)……二五

文藝

述懐一首……敬亭生…二八

時事一斑

陛下煖爐を廢し給ふ……二九

恤兵の意始めて徹す……二九

戰地の病院……二九

宗教界の二大傾向……三〇

個人の膨脹……三〇

婦人共立育兒會……三〇

大地震ふ……三〇

春季附錄　文藝

賢母……蘇峯生…一

支那の落語……思軒居士…一一

ゆり子がふる里……湖處子…二四

この馬鹿……嵯峨のや主人…三九


未醒

社説

料理

凡そ人の情として極めて手近く極めて日常なるとは、大切なることにても之れを忽がせにして注意せぬが多し。料理の如きは其最も然るものにあらずや。

食は日に三度づゝ繰返すものなれば其の日常なることこれより甚しきはなかるべく、生るれば則ち何人も食ふことを知らざるなければ其手近きこともこれより甚しきはなかるべけれど、去りとて食は以て生命を持續する所にして、人の健康不健康幸福不幸福に大關係を及ぼすものなれば、之が食物を料理することと家庭の務としてこれより大切なるはなかるべし。

花を活け、茶を抹し、琴ピアノを弄し、小説を讀み、外國語を語るのみ、婦人の高等なる業ならんや。一國の宰臣が一國を整理する如く、一家の主婦が一家を整理するは、婦人の最も貴ぶべき天職にして、料理は家事を所理する中につき最も重要なる事たり。中流以下の家庭にして主婦自ら料理人を兼ねざるべからざるものは言ふも更なり、たとへ中流以上にして家に下婢若くは純然たる料理人を雇ひ置くものにても、少なくとも其事の大意に通ずるにあらざれば、一方ならぬ不便と不都合とに逢ひ、家庭の幸福を減殺すること少なからざるべし。

人は知らざることを命令する能はず、命令する能はざる所あれば整理する能はざる所あり。整理する能はざる所あれば家庭の幸福を傷つく。

食事及び料理の目的とすべき事に、三個の記憶すべき

條件あり。

第一に人は食ふ爲に生くるものにあらずして生くる爲に食ふものなれば、食事をなすにも料理を事とするにも常に此意を躰することと肝要なり。酒を飲み烟草を呑むの不可なるは之が爲のみ。大飲過食するの不可なるは之が爲めのみ。從て食物を料理するにも徒らに美味をのみ擇ばずして、成るべく衛生の規則に順へる品料を擇び、成るべく衛生の規則に順へる調理をなし、又成るべく衛生の規則に順へる品料調理の變化交替をなさゞるべからず。而して身料理の法に明かなる主婦にあらざれば、能く之をなし若くは之を命ずること能はざるべし。

第二に物は之を用ひて盡ることとなけれども制限なく之を用ふること能はざるものなれば、何事をなすにも常に經濟的ならざるべからず。料理法に於ても大に然ることにて、成るべく廉價にして成るべく普通なる物を以て成るべく衛生的に且つ成るべく人の口に適すべく變形せしむるは料理術の第一義なり。又成るべく無益の品料を用ふることなく成るべく同一物を多樣に變形せしめ以て之を成るべく衛生的にし且つ成るべく人の口に適すべくなすを要す。而して身料理の法に明かなる主婦にあらざれば、能く之をなし若くは之を命ずること能はざるべし。

第三に食事は言ふまでもなく生くるが爲めのものなれども、亦一方に快樂の一たれば、成るべく快樂的に料理し成るべく快樂的に食事することも必要なり。固より美食をこれ事とするは賤むべき飲食の人の事なるのみか、一家の資財を傾くる初めなれば、其不可なることと勿論なれども、同じき價値のものならば必ずしも其旨からざるを擇ぶに及ばざるべし。旨からざるものを變じて旨きものとするは料理の料理たる所以なると共に、食事は亦家庭快樂の一なれば、若し主婦手づから

調理したるものを以て人を會して夜食を饗する如き、人を喜ばせ人を樂ましむること少少にあらず。而して身料理の法に明かならざる主婦にして、能く之をなし若くは之を命令するを得んや。

要するに家庭の幸福など云へば甚だ鹿爪らしく聞ゆれども、其實却て此等尋常茶飯の事の間にあるを知らずや。或人の歌に、

樂みは春の櫻に秋の月
家内中よく三度喰ふ飯。

科學

怪物と呼ばれし彗星の談

太陽系統と、其間に散在せる無數の遊星の間に出沒定りなく、道すじ不規則なる一の怪物あり。長がく房々しき尾を引きたるは、狐の如く、暗赤色と變ぜし時は丹波漿酸のおもちゃの如とく、赫々として人目を射るに及びては、星の大なるにさも似たり。此の者非常の速力を以て、天空を走ること飛鳥の如く、太陽に近かづく時は、恐ろしき迄光りかゞやき、遠ざかるときは漸々光を減じて、遂に目にも止まらざるに至たる。今日に至る迄其數未だ詳びらかならざれども、數の甚だ多くして、大なるもあり。小なるもあり。太陽に一度面會して、數千年來未だ再會せざるものあり。屢々太陽の安否を問ふもありて、少しも定まりたる規則の中に、生活せざるが如し。尙ほ奇態なるは其尾なり。始じめ顯はれたる時は、數尺にも足らざるかと思へしもの、太陽に近かづくに隨たがひ、僅かに一時間を出でずして、其長さ實に數十萬里の亘るとあり。かゝればこそ、天文學未だ開らけずして、之が彗星と呼ばるゝ一種の瓦斯體なるとを發見する迄は、或は天の動物なりとし、或は不可思議なる怪物なりと云ひ、若しくは

之を不祥不吉の魔物の如く恐れ慄のゝきて、禮拜せしは、無理にもあらざることゝ云ふべし。我が國にては近くは維新の亂のとき、恰も前徴と云ふ好時期によくも適して、彗星は顯はれたり。遠くは弘安二年、彼の蒙古が十萬の兵を率ひて攻め來れる前へに、此の星は顯はれたり。西洋にても不祥の徵しとして、恐れたる此の星は、最も恐るべき仕方に顯はれたることありき。こはサラセン人が、基督教に攻め入りし時のことなりき。一夜俄かの星光は恰も萬神が激怒の憤火を吐きし如く、天の彼處より此處に至る迄、光り輝やくこと、白晝の如く一時より一時と時の進むに隨がひ、光輝漸やく强くなり、拔きつれたる劍は、之れに映じて、鬼火萬邊よりおし寄せたる如く、その凄まじさ、例へんものなく、さすがに武けき教主マホメツトも殆ど恐れをいだく計りなりしがこはマホメツトがコンスタンチノーブルを圍む時の事にして其日迄連夜光りは依然として變りなかりける。此に於て圍まれたる基督教の大僧正等は大に心まどひ、或は祈らんか、或は詛わんか、爲さんすべさへ知らざりしが、遂に大なる决心を以て、彗星と回敎とを共に詛ひ退ぞけたりと云ふ。

彗星とは何物ぞ

とは無學なる大古しの人々が迷信より起りしことなるが、學術上より之れを研究するときはゝ决して恐るべきものにあらざるは、小學童子も明かに知る所なり。通常の肉眼にて見るを得べき彗星は、頭と呼ぶ一點と、尾と名づくる長きものより成り立つて、尾は大概後へにあるを常となせども、時には、尾の前に付きて、所謂鬚と名づくるを生ずるとあり。たゞ肉眼に見ゆるの外に、天空には更らに無數の彗星は處々に拵かりたる也。之れが尾なる部分が、極めて稀薄なる瓦斯にて成り立ちたることを、萬國擧つて識認するに至りた

るは、僅かに數年以來のことにして、其瓦斯は無論我が地球表面を繞圍せる、空氣よりは數等輕きことも、亦た一般の輿論とはなれり。如何にしてその瓦斯なることを假定するに至りしかと云ふに、此星太陽に近かづくに及びて、漸くその尾を擴ぐるは、太陽の熱に感じて擴ぐる、瓦斯なるを知る。又たその稀薄なりと云ふことは、此の瓦斯、太陽に近づくと同時に、非常の速やかさを以て熱に感ずるを以て、知らるゝ也。其の頭と呼ぶ部分も、同じく瓦斯を以て組織せられたるが、尾よりは遙かに濃厚なるを以て、太陽に近づくに隨がひ暗くなるを見るべし。

彗星の新說

然かるに最も新らしく、最も賢こき一說は、學者の凡ての仲間に引き入れんとする勢ひにて、顯われたり。然して學者の大抵は、之れに一統するを承諾せり。其說と云ふは他ならず。彼の『凉み臺又たも出でたり星の論』とうたわれし九月十月の頃には一夜の中に數へも盡きせぬ流星を見ることあり。こは地球が流星、即ち隕石の二定軌道の間を通過するにあるとは、遂に硏究を遂げられたるが、學者は又た大膽にも、この隕石と彗星とは、全たく同じ原因より起るものなることを斷言せり。即ち隕石は彗星より來るとなせり。されば先きに彗星を瓦斯なりと云ひし學說は、その尾の餘りに早く光を一面に傳ゆるより出でし說なれども、彗星が石や金屬の集合躰なりとするも、其分子甚だ小にして、且つ稀薄に擴がりたりとするときは、必しも之を瓦斯躰なりとずる說と相反するものにもあらず。されど頭は一種燃へ易き瓦斯なることは、最近の望遠鏡の觀察によりて論定せられたり。而してその最も多き分子の集まりたる所は、たがひの磨擦によりて、熱は一層はげしくなり、多分蒸發氣と變ぜるならんとは、學者の信ずる所なるが、惜むらくは精密なる望遠鏡の出

来し以來、未だ一度も大にして近き彗星に遇ざるにより、未だ確かなる發明を爲すに至らざれども、學者は各々次回の彗星の望遠鏡の達するものに遇はゞ、一大發見を爲さんと喜しみ、腕を磨がきて待ちつゝあるなり。

其軌道と地球の關係

彗星は各々相等しからずして、常に定まりて太陽を回轉するもあれば、一生に一度太陽に遇ひて、決して再たび遇わざるもあるは、已に說きたるが、其の定軌道を。定時に回轉せりと云ふ彗星も、我が地球の如く、年年等しく、全き同じ軌道を回轉するを得ず。そは其の軌道餘りに長隋圓形なるを以て、長き旅行の路すがら、他の引力ある星のために引き付けられ、だん〳〵その近くに引き寄せらるゝを以て、幾萬億の彗星は、何れも己が定まりたる住みかを求めつゝ、遂に得る時はあらじ。中には全く引き付け終せらるゝものも少なからず。然からば其の不定なる無數の彗星が、大空を旅行するに當たり、若し地球と衝突するときは、如何になるべき。是れ起り易き疑問にして、又た答へ易すきの問題なるべし。彼の十月十一月頃の隕石の軌道を地球が通過するに當たりてや、屢々地球に落つることめづらしからず。されども幸ひに何づれもその躰小にして、地上に達する頃迄には、空氣と磨擦し悉く燃へきるゝと、其尾の粗薄なるとによりて、何の害もなさざれども、曾には容量大にして全く燃へ切れず、火を吐き熱を發しつゝ降だるとあり。千八百十年の頃なりき―スペインに降だりし隕石は、大さ三尺、重さ百貫近かくもありたるが、かゝる隕石に出遇ひたるときは、其の結果は恐るべきものあり。即ち一時間計りの間は百雷の一時に轟ろくが耳を聾せん計りの大響ありて、當たりの人々何事ぞと驚き、逃け場も知らず慌わてさまよう中尾を呼はれ燒けたゞるべき無數の火の子は、

當り次第に物を燒きて、更らに用捨なし、幸ひにして軒の下、家の中にある人々は、其の燒け傷は逃るを得べけんも、不幸にして外にあるもの、特にもその頭なる部分に打たれし者は、人畜の別なく憐れなる最後を遂げざるはなし、天文學者アラゴー氏の說によるに大なる隕石が地球と衝突するは三億萬中に、僅か一の割合なりと。今を去る六十年前、千八百三十二年には將さにその危險に遇わんとしたりき。若しその時の彗星をして、僅づかに一ヶ月を早からしめしならんには、地球は非常の運命に出遇ぶべかりしに、さわらざりしは天幸と云ふべし。彗星と一口に云へば小なるに似たれども、中には太陽にも勝さりたる大さのものあるが故に、若し光が燃へつゝある瓦斯躰にして、地球と出遇ひたらんには、我等は生きながら燒熱地獄に落りて逃がれんに所もなく、地の表面も元の顏色は失ひて、燃け土の瘠土と變わり、地球の軌道は、衝突の度によりて、如何に變ぜらるゝやも計り難し。若し之れを固躰とする時は、其面積は瓦斯程實からずとするも、地球面は之れがためにつぶされ、山は海の中に同居して、海は陸の方へ上ぼり、人畜は大洪水のため、幾個の紀念碑を設けらるゝの運命を持つべかりしに。

彗星は見へざる地位

如何なればかく無數にある彗星が、人目に見ゆる時と見へざるときとあるやと云ふに、彼等の多くは躰質稀薄にして、光りの薄すきと、又た其位置の丁度好く橫になりて、頭と尾とを橫より見る樣になるとき計りは、少なくして、或は頭の方より直正面に之を眺むるか、尾の方より正面に眺がむるが如き地位となるを以て、長がき形を見ざることあり、敎授ティト氏の說によるに、海鳥が幾個ともなく空中に飛び上りて、一羽一羽の形の見へざるに至りたるとき、その羽は光線の反射を受けて、恰も彗星に彷彿たることありと云ふ。

尙ほ彗星が瓦斯なりや固形躰なりやと云ふに付きては絕へず學者が研究を凝らせる所なるが、拯光器を以て試驗せし結果によれば、其光は太陽より出でしものなるを顯わせり。されどその一部が太陽より出でしものなりや、全躰なりやと云ふに至りては、未だ之れを詳ひらかにせず、彗星に付きても、學者が發見者の功名を得べき多くの場合は、空しくわけて待たれつゝある也。

家政

母と其子

（一）話しの事

愛子を持てる母人よ、御身は子供を賢しこくえらき人物に育てんと望み給ふか、さらば小さき時より說話を爲し聞かしむべし。餘りに其の子のためにむづかしからずして、値かく、淸潔に且つ面白き話しをば、小供は非常に喜ぶものなり。其話しより得る所の利益は、小供のために菓子一個を與へ、若しくは新奇なる弄物を以て得べからざるものにして、其子が一生の趣味を高尙にし、注意の力を增し、物事の理解力も、想像の力も、工夫力も、凡ての好きことは、その話しより生まるゝなり、試みに其子に、加藤淸正の話しを、面白く、話し聞かしめ給へ。明日其子が遊べる樣は、戰爭の眞似にして、汝は何を爲して遊そべるやと問んに、加藤なりと云ふべし。此の頃の如く、日淸戰爭の話しを耳にせる子供の樣を見給へ、彼れも之れも手に持ものは、喇叭と鐵砲のおもちやにして、若し二三の小供集るあらば、直ちに列をなし、軍歌を歌ひて進行するにあらずや。こは小供が聞ける話しによりて、其心を形くらんと自ら、鑄造の業を爲せるものにして、

彼は聞く所の者によりて、心を練り想像を起こし、趣味も工夫も、理解も、それ相應に起すなり。然れども玆に最も注意を要すべきことあり。そは外な



らざれども、小兒は非常に信仰の強きものにして、母がおとぎ一與に造りたる昔し話しなど聞しむるときは、之を信實に有り得べきことゝ信ずることあり。こは大人が時々夢に見て、自ら其の虚りか眞かを分かち得ざるがごとし。之れは餘程成長したる小兒にあらざれば、其眞虚を別かち得ざるものなるが故に、話すとき能く注意して、その眞ならざるを反復說き聞かしむるか、さもなくば信じて益なき話しは避くるを可とす。子供の時より、餘りに空想に傾むきて、益にもたゝざる想像を爲すの癖に落るときは、長じても尙ほ實際の事を熟考することを得ざる、一種の仙人か、狂ちがひか、風變りの詩人かの如くになりて、常に惚やりと、有りも得ざる事を繰り返し〳〵想像し、自らその空想を斥け得ざるに至るの恐れあり。若しかゝる傾きに落るの徵候あるときは、成る丈け實際の職業などを勸めて、物を考ゆるの暇なき樣に、仕向くるときは、醫するを得べけれども、かゝる弊に落ざる前より、常に話しに注意するときは、事を未發に防ぐことと容易なり此の如く說話は、其子が一生の基礎を造くるに最

も大なる勢力を有するものなるが故へに、之を注意すると否とは、その子を賢こくして英傑ならしむべく、愚にして人の厄介者とも爲し終らしむべし。

（二）如何なるおもちやを與へんか

年も六七才にもなりたるものには、加藤の話、楠の話工夫して發明を爲せし話、若しくは節儉を以て身を立てし話等を、簡短に說き聞かしむるを得れども、未だその理解力のなき三四才の頃は、たゞ弄物のみぞ、身の樂しみなり。然るに其弄物の中にも、益あると、害あると、益もなく、害もなき、所謂有りがひのなきものと種々あるがゆへに、其の幼少の頃より、少しの無駄なるものを與へず、益あるもの〳〵と心付くれば、天性如何に愚なりと雖も、敎育の功によりて、賢こく成り得ざることはあらざるべし。然かれば、如何なるおもちやが、最も其子によきやと云ふに、完全なる品よりは、反て易きもの粗造なるを可じとす、其理けは小兒は凡て創造を好のむものにして、其の好みは長じての工夫力となり、發明力と變ずるものなるが故に、その嗜好は成る丈け、滿足せしむるを勉とむべし。たとへば一個の人形の與ふるにも、衣服完備し、一點の不足なきものより、むしろ丈夫にして、裸かなるを可じとす。彼はその裸人形に、布片れを工夫して衣物を着せ、帶をしめ頭巾を被らしむるを以て樂しみとし、反て完全なるものを厭とうべし。通常の小供の嗜好を滿たし、その創造力を增すに最も適したるは、組木とて、木を組み合わせて、家や、橋や、鳥居や、机等の形を造り得る弄物、或は畫合せとて、四角なる木に畫紙の一部を張り、之れを集むれば一個の完全なる形と爲る樣に造りたるもの等は、幼兒が組み立てゝ喜び、自らの力を以て之を破壞して喜ぶと共に、傍に居る者をも招きて、共もに喜ばしめんことを勉とむることあり。されば凡て弄物は、かゝる目的を以て撰び、高

倘に過ぎて解からざるものよりは、反へつて粘土、木片、或は石片、瓦くづの如き、材料を與ふべし。元より氣候の許るすときは、戸外に出で、土を掘りて山を造くり、遠近の風景を眺めて、高尙優美なる思想を養ふ等は、欠くべからざる遊戯なりとす。

(三) 長じたる小供には如何

長じたる小供には、園を作くるの器具、圖畫、縫ひ針等の如き、想像力、工夫力を增すの道具を與たへて、將來種々の職業を執るに至り、それ〳〵の考への出づるの準備に供し、且つ小供の時より觸れなれたる道具の事とて、其使ひ用等に熟練するが故へに、好き成績を顯わすの大なる助けとなるべし。又たその子が經歷したる所を、平易なる文章に顯さしむることも、一種の慰みともなり、遊びともなり、旁、文章は、記憶の力をまし、想像の力もまし、斷定の力も研くを得て、大に將來の助けとなるべし。是れ等は、凡て母なる人が、常に心にかけて「その兒のためを計るより、次きに〳〵と、新奇にしてその兒の喜ぶべき弄物の工夫は出づるものにして、母が之れを心がくると否とは、その兒が無益なる腦を用ちひて、無益なる半生を送り、長して賢しこく英傑英才となると、然らざるの別け目なるを知らば、如何に母たるものは、其の心掛けの肝要なるを知るに足らん。

遊びの新趣向

智慧の杯

この遊びは、佛國ヘンリー三世の朝にて、非常にもてはやされたる者なりと云ふ、何ともなきに似たれども、智を用ひずしては、中々に出來ざるより、智慧の杯とは名づけられたり。

道具は一個の木製、若しくは象牙の球と、一本の棒の

一端を、杯の如くし、他の一端を尖らしめたるもの丶二個にして、球には棒の尖端の刺さ丶るべき穴を穿がちて、紐にて棒の中央を括くり、遊そばんとする人は、



圖の如く棒の中央を拇指示指の二本にて摘み、中指と藥指の二本にて、その紐を剪み、球を高かく投げ上げ、杯にて受け留むるか、尖端にて球の空を刺すを勝利とす。杯にて受くるは、未だ熟せざる内の事にして、上達すれば尖端こそ反つて面白くなるなり。

五　色　藁

日本人は指先きの怜悧なるを以て、世界に冠たり。こは婦人の刺繍の上にも、男子の圖畫の上にも、彫刻にも、凡ての美術の上に顯われて、賞美せらるゝ事也。これは日本の箸が、指先をき最も能く鍛練するが爲めなりと云ふ。此の遊びは、それ迄の助けにはならざれども、大に指の先きの神系と、その熟練を増すが故に遊びながらも亦益あり。

何づれのおもちや店にても、通常賣れる五色の麥藁を求めて、各々長がさ二三寸のもの、五六本を作くり、其内の一人之れを集つめて、先きを揃へ然る後これを卓子、或は疊の上にバラ／＼と亂し、積んで山となし、さて席順を以て其藁を、上のものより一本づゝ他の藁に觸れざる樣に取り、過つて觸れたるときは、始じめより取り得たる藁を悉く元とに返し、かくて山の全く無くなりたるとき、各々が得たる藁の五色を程能く配置して、山水なり、人家なり、古木なり、何なりとも好のみの圖を形とり、最も多き藁を以て、最も美しき畫を畫きたるを以て、席中の優者とす。此の遊びは優

美に、且つ高尙にして、一方には番の意匠をも考ゆるが故に、貴婦人令孃の遊びとしても、女學生の休暇遊びとなすも、少しも害なくして益あるのみ。

同じく五色の藁遊び

先の遊の如く、五色の藁を以て畵をえがくには、少しく常世風の敎育の端にても知らずしては、徒らに苦るしむのみにして、面白味更らに少くなく、一坐しらくる事あり。かゝる時の遊びには、豫じめ色の價を定め置きて、紫は五、赤は四、靑は三つ、黃は無代價等の如く定めをき、取りたる藁を勘定して數の多くなりたるを優として、賞品を與ふるも可也。

卓子とボタンの遊

とは會食等の席上にて、一興ある遊びとして用らひる、仕方は一人每に二三個づゝのボタンを分ちさて、卓子の兩傍に同じ人數に分かれて、整列し、相對坐したるものは、互ひにその前にボタンを一個づゝ置き、此處にあるボタンを爪にてはじきて、對へる人の前にあるボタンを落とし、多く落したる側を以て勝されりとなす。

今日の食膳

氣轉料理

客を待たして魚屋へ走り、八百屋へ走しるは、混雜らしく、反て客の心配を招ねきて悪しゝ、さればとて平生貯ふるには、腐敗する品、固くなる品等は用時の間に合ず、之れ等の兩つながら全ふする品は、味ひ美ならず、これ臺所の大臣の困る所なり。今茲に示めさんとするは、最も長がく貯へて、變味腐敗の恐れなき、鹽鮭と、昆布を用ひて、驚ろく計りの味ひよき品を得るにあり。其の作り方は、鹽鮭を數日の間水にひたし、毎日その水を更へ、さて細片となして胡麻の油に

て煮付け別に板昆布を鹽だしゝたるものを五分計りの小片となし、共に白味噌の擂りたる中に入れて能く混ぢ、一ざしづゝを一丸めとなして、網に上せて火上にかけ、全面狐色となり、香氣芬々とするを度とし、火上よりおろし、鰹魚だしの湯の中に入れ、胡椒山椒等を役味として吸ひ物となすにあり。

鰕の三品汁

鰕の頭と、尾と、皮とを去り、爼の上に上せて庖丁にてたゝきながら、くづを振りかけ、さて之れを油にてあげ、大根、葱、胡椒の三品と共に、すましの汁となして用ゆるときは、一種混和したる風味ありて、病後の食物等には特に口受けよし。

鳥味噌

鳥は何鳥にても若きを撰らび、毛を去り、皮を取り、腸を抜きたる上、鍋に入れ、味淋を用ゆる家にては味淋にても可なり、又水にてもよし、朝より夕に至る迄、絶へず煮る時は、肉柔らかくして綿の如くなるべし。此の時取り出だして骨を抜くときは、骨は肉より美事に分かるべし。さてその肉を、醤油若しくは鹽と砂糖にて味を付け、更にジヤガ芋の湯出たるを取り、先きの鳥と混ぢ、擂鉢にて擂り混ぜ、皿の上に美々しく盛りて、食膳に供すべし。

美事なる鯛の料理

今は鯛の多き時なり、之を以て擂身を作り、その中に長芋を擂り込み、鹽少し入れて小皿に入れ、煮立ちたる湯の中に浮かべて湯出るときは、丸くそのまゝに湯出るべし、之れは淡白にして、誰れの口にも適する料理なり。

パン肉

パンの焼けたる所を去り、上より湯をかくるか、若しくは一分間計り湯の中に投じて、柔らかくなりたるとき、布にて絞ぼる時は、ばら〳〵とくだくべし。之れ

に牛肉のたゝきたるものを混じ、バタも望みによりて入れ、厚さ二三分の板にのばし、鶏卵の解きたるをかけ、その上よりパンの粉をふりかけ、牛の製し油にて煎くべし。

豚の肉絲

豚の生肉を細く長がく切り、沸騰せし湯の中に入るゝ時は、收縮して短じかくなるべし、その中へ胡蘿蔔、干瓢、葱、椎茸等を入れて、煮る時は、美味なる汁を得べし。

手藝案内

一種の作業卓子

（ウヲーク、バスケツト、テーブル）

圖に示す者は多く西洋婦人等が旅行等に携帶する「ウヲーク、バスケツト、テーブル」と申すものにして、大きなる袋に木の四本脚を附して直立せしめ、兼ねて卓子にも代用せらるべきものなり、其製作法は圖に示して明瞭なり、袋も四本脚も伸縮自在にし、疊めば携帶に輕便ならしめ、擴げば以て直ちに實用となり得べし、



其袋の布帛は大低薔薇色の繻子の條つきある暗紅色に模様を散せる印度絹織を用ゐ木の脚は美麗なる色にて塗れども、我國人が之を製造し之を使用せんとならば、何を用ゐて妨げなきも徒に美麗ならんよりは實用的なるを要す。

襟巻と手暖袋

節は大寒に入りて寒威甚だ嚴烈にして正に指を墜すの時なり、斯の如き昨今の時節は益々防寒の具の必要を感ずるものなるが襟巻の如きは愈々急用を感しぬ。

全體より言へば頸巻は用ゐぬ方却つて衛生上に得策なり、何となれば冬時頸巻を用ゐる時は暖快頗る多く温暖の候に至るも尚ほ之を脱却するを欲せず、常に之を使用する弊は遂に頸邊の皮膚軟弱に傾き之が爲に些少の事情に遭遇するも容易に風邪に罹るに至るなり、かるが故に成るべく襟巻は用ゐぬが衛生の旨に適ふとも申すべけれども、それは血氣の壯年者に望む所ろにして、老人や小兒は皮膚軟弱なるを以て、寒威凜烈の候には之に應じて保護攝生の道を怠るべからず、かるが故に再び曰く、襟巻の如きは皮膚軟弱にして風邪等に罹り易き老人及小兒には必要なりと。

襟巻には種々の種類あり、譬へば「フランチル」の如き又は天鵞絨の如き又は縮緬の如き又は「もんぱ」の如き又は毛絲の如きものあれど、此中自製せられ得べきは毛絲の襟巻なり、されば玆に此製作法をしをりせん。」

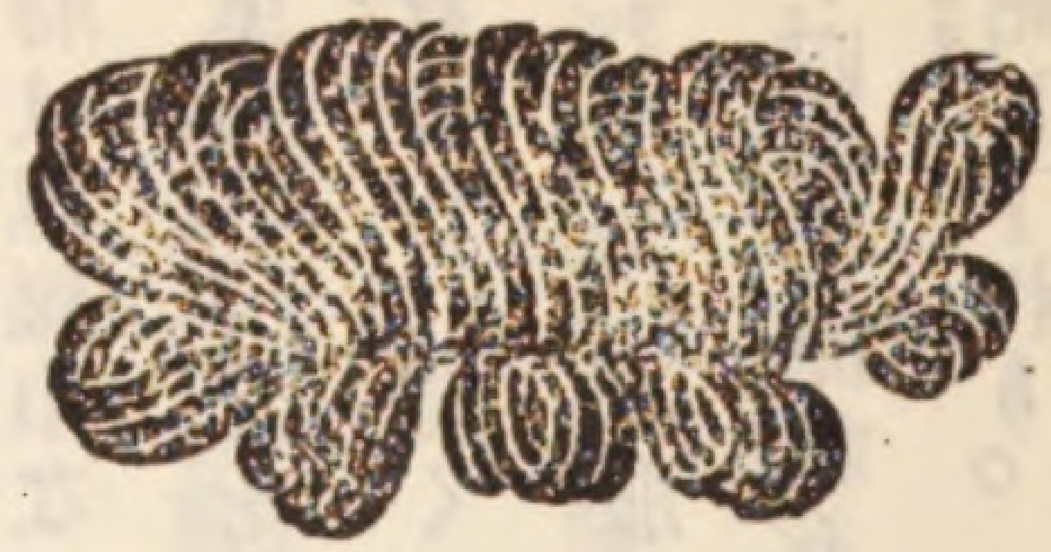
襟巻は玉つき六寸針二本にて糸は並糸を用ゆると便宜とす、其の編方は

第一の編方　は一本の針に糸數六十をかけて一廻りを「メリヤス」編にてつくり、二廻り目は針に糸を搦みつけ、一つの目を單に針にうつすのみにて二ッ目を一緒に編む、又次の廻りも一つを針にからみ、一つを移して二つを一緒に編むなり、斯の如く六十ある糸の結尾まであむことを以上の如き順序にて丈け四尺位も編み行かば襟巻には充分なりと知るべし。

第二法　は鈎針にて並糸を用ゐ、最初六十の鏈編を製し、針に一つからみ、一つの目にかけ、次も亦右の如く一つの目に各々之を四つ目までかけ、此の四本を一緒にかけ引抜きて締めたる後、最初の如く糸を針にからみ又一つを掛け、四つ目まで針にかけて一緒に引抜き締むるなり、以上の如き方法を以て其の結尾まで編み行くに於ては、四つの徑花摸様を編み出すに至るべし。

寒氣には手袋も必用なり、然れどもこれは重に西洋婦人などに用ゆれども、外出等には餘程暖氣を保つものなれば筆の序に記すべし、但し手袋もいろ〳〵に製し羅紗又は羽毛製なんどあり、小兒用には毛絲製も屢々見受らる。

毛絲製を記すこと次の如し。



玉つき六寸針二本にて毛糸は極太のもの或は並糸を用ゆ。

一段 最初一本の針に毛絲五十をかける、然かする時は巾六寸位となるべし、之を針口指二本をそへて指と針とにて五度糸を巻き「メリヤス」編を爲す如く引出して編むなり、次の目は普通編を爲し又は次の目は襞に爲しある如く指と針とにて五度糸をからみて引出し、以て此段を終るべし。

二段 は平編にて一廻りを編む。

三段 は一段の如く普通編を爲しては指と針にて五度糸を巻きて引出し、斯の如くして此段を終るべし。

四段 は二段の如く平編にすべし。

それより五段は三段の如く六段は四段の如く、七段は三段の如く、八段は四段の如く一段毎に編方を違はせ都合四十二段編み終りて後、編始の部と編尾の部とを「ミシン」編にてまるく閉ぢ合はするを要す、閉ぢ合はする前に裏地を附するを忘るべからず、裏地は天鵞絨、羅紗、若しくは「フランネル」第一なるが、中には縮緬、緞子、甲斐絹等をつけたる向もあれど、温暖を保つ爲には前者に如かず、却つて木綿切を用ゆるこそ宜からめ、凡て毛織、木綿は多く温暖を保ち絹類は少きは能く人の知る所なり、望により眞綿又は木綿を入るゝも妨なし。

染汚拔法補遺

染汚扱法は屢々本紙に記したるが本號にも思ひつきしまゝを記して其足らざるを補ふべし。

（一）木綿衣服に油氣染たる時は大根擦にて油のつきたる部分につけ置き然る後に熱湯にて洗ふべし。

（二）疊の上に墨などのこぼれたる時は濕雜巾などにて拭ふは却つて其部分を擴ぐる患あり、之を落さんとならば墨のつきたるまゝに放置し、能く乾きたる後草履又は藁屑にて摩し落すべし、衣服に墨のつきたる時の心得は、本紙三十四號に記載あり、インキは牛乳にて洗ふ事は曾て記し了れり。

（三）果物の液汁によりて染點を生じなば漂白粉の汁を以て洗ふべし、殊に果物中蜜柑の如き酸類に毛物の衣服つく時は忽ち變色するに至るものなれば用心すべし。

（四）小袖類に油氣のつきたる時は水一升鹽一合の割にて混合し、之を能く煮沸し微温なるを待ちて其局部にそゝぎ洗ふべし

（五）縫箔の類何にても水氣のつくを厭ふもの、油氣つきたる時は其局部に滑石の粉をまぶしかけ、紙を敷き火熨斗を數回あてゝ撫つべし。

（六）色物の小袖に雨、雪などのかゝりし時は鹽湯にて洗ふを可とすれども、色變らざれば其まゝに置き洗はざるが得策なり。

（七）白き小袖に茶の染みたる時は、飯の「とりゆ」に洗ふ。

（八）小袖の垢を退除せんとならば、小豆粉を熱き湯に引茶五ふく程も入れて用ゆべし、隨分効力あり。

（九）紅絹染、藍染などに雨濕のかゝりたる時は、前記白の小袖同樣鹽湯にて洗ふ。

（十）漆のつきたる時は味噌汁第一等。

（十一）鳥もちのつきたるものには鰌のぬめりにて落すは一法なりといふ。

（十二）血のつきたる時の心得は本紙三十四號に詳しけれども、尙次の法を記して讀者の參考とすべし、生姜を薄劍にして血の染みたる上に置けば、必らず血之に移り又は白きものにつきたるには燈心を濕して局部をこすれば汚點脫却すといふ。

（十三）魚鳥の血又は油染みたるには蕪汁の汁にて洗へば効能ありと或人の實驗談。

（十四）澁のつきたるものには燈心を煎じて洗ふか又は松魚節を煎じ、又は味噌汁にて洗ふか又は麻のあくにて洗ふは甚だ便法なりと。

（十五）煙草のやにのつきたるには、白砂糖を煎じ洗ふこと專一なりと。

（十六）衣服に染みたる茶の汚點は、リスリンを少しつけて洗ふこと肝要。

（十七）「メリヤス」又は襟卷等を洗ふには、馬鈴薯にて糊汁を製し、これにて洗濯すれば必らず妙なりとぞ。

（十八）古き天鵞絨を新らしくするには、裏の方を熱湯にかざして充分に表まで湯氣を透徹せしむる時は、表の毛は悉く直立するに至るべし、斯く爲し終らば四方の隅を充分に張りて裏より火熨斗をかくる時は、濕氣去りて光澤出で再び新しきものと變ずべし。

（十九）白板等に墨のこぼれ又は書きたる文字を落さんには鹽を指にて摺りつくれば落つるなり。

（二十）下駄の疊の汚れたる時は豆腐の滓にてすり落すべし、汚點の去ること妙なり。

雜文一斑

春夢

流行の栞

明治廿七年中の流行傾向

明治廿七年は已に過去に屬す、過去に屬する流行の如何を玆に記するは

少しく不用の嫌なきにあらざれども、過去を推して現在及未來を察し、昨年の流行の傾向を記して今年の流行世界の發現をトするも亦必ずしも無用なりとせず。

昨年の流行社會の潮流はさま〴〵にありつれども、如何なる潮流が大潮にてありしか、余は斷言す最も大きく最も勢ありしは、實に三大潮流とす。

三大潮流とは何ぞや、曰く俗氣を帶びし事、曰く武骨の風となりし事、曰く益々古風なりし事。

(第一)俗氣を帶びし事　廿七年の流行界は何故に俗氣を帶び來りしか、此道に注目せる諸卿は玆に余が贅言を俟たず、其原因如何なる點にあるかを認め玉へるなるべし、其原因とは取も直さず、實に日清戰爭にてありしなり、實に昨年の下半期に於て。日清戰爭は何故に流行界を俗氣化せしか。

憚なく言へば余等が流行界の獨立より見れば、日清戰爭は有らん事を望まず、又無からんことを望まざるなり、日清戰爭の起りしは幸福にてもあらず、不幸福にてもあらざれど、我大日本が連戰連勝の勢を以て已に盛京省の大部分を占領し、今や破竹の勢にてやがて支那全國を席卷するに至るに於ては、予等が流行界の爲めに喜ぶ所は、我日本帝國の流行社會の潮流が益々海外に瀰溢するを見るにあるのみ、而して昨年下半期に於て日清戰爭の影響を受けたる流行は、其形躰俗氣を帶びしに係はらず、少くとも國民的となるに至りぬ、何を以て之を證す、從來の流行品は「江戸の水」「利久形」「福助好」等に類する一部の名稱に屬するもの多かりしが、一變して「日本大勝利」「やまと形」「帝國萬歳」等の如き大名稱を冠せる流行品日本全國に蔓延せり、是れ余が流行界の爲に喜ぶものなり。

然れども其形躰の俗なるは爭ふべからず、何故なるかを短く言へば、流行品の供給者が強いて且つ多量に其需用者に流行品をすゝめたるが故に外ならず、抑も流行品の世間に流布するは、種々のもの其機會を爲すと雖も、需用者の嗜好と供給と相俟つて相行はるゝに至る、換言せば需用者の心と其物品とが双方より一致せざるべからざるなり、然るに廿七年後半期に於ける流行界の現狀を見るに、たとへ需用者の心に日清戰爭を希望するものあるを疑はずと雖も、社會凡ての事物悉く日清戰爭の趣向を帶ばしむるに於ては、勢ひ俗了せざるを得ざるべし、例を擧げて言はゞ國旗の如きものに聯隊旗若しくは海軍碇模樣を出し若しくは紙鳶や軒提灯に日の丸等を畫がく如きは適當にして、又料理に於て乘取汁とか旅順口取とか又は支那徽壓(菓子)の如き其名穪面白けれど

も、日清戰爭の冠らしむるも實に不釣合千萬にして意味も趣向もなきもの比々として之あり、尋常一樣の乾海苔に大勝利の名稱を附して何の意味かある、分捕饅頭は矢張普通の饅頭なり、萬歲櫛とは矢張普通の差櫛にあらずや。

右の理由の外に日清戰爭流行品の俗氣を帶ぶるに至りしは其流行品は際物なるが故に、其價も廉ならざるべからず、價廉なるものには高尙の趣意を寓すること甚に困難なるが故ならん。

併しながら日清戰爭の影響を受けて流行界は如何に此强勢力に壓せられたるか、演劇に於て、寄席に於て、覗眼鏡に於て、やつさせに於て、衣服に於て、羽織の裏に於て、婦人半襟に於て、幽禪縮緬に於て、手拭風呂敷に於て、狀袋、卷紙、筆、盤に於て干菓子、米菓子、せんべい、饅頭、辻占あめに於て、石鹼、はみがき、水おしろひに於て、殊に婦人の髮具に於ては甚しかりき、差櫛に於て、花簪に於て、根掛、手柄にて『萬歲』『大勝利』の名稱を襲らざるなく、藝術たるタホ止めに至るすら戰爭模樣を出すに至りぬ、其他乾海苔、酒、醬油、花かるた、双六、めんこ等何に限らず大概の商品は日清戰爭の意を附せざるはなし、是等の事情は其節々の本紙流行案内に記し置きたれば、巨細に涉るを要せず、讀者の能く知らるゝ所なるべし、此流行の大勢力は二十七年後半期に止るべきか、いな〳〵大に否なり、此傾向たるや我日本帝國が北淸に連戰連勝を重ぬると共に益々涵養し、滔々として其の底止する所を知らず、故に余は斷言す、此流行の活動力は日淸戰爭の槓杆によりて間斷なく動かされ、日淸戰爭の續く限は止むを知らず、北京落城即ち日本最後の勝利を以て其絕頂に達し、而して後此流行は漸次に影を收むるに至るべし。さ

(第二)武骨の風となりし事　之も亦日淸戰爭に影響せられたるものなり、これ實に喜ぶべき顯象にして柔弱の風俗變して剛健となる、譬へば手織木綿の衣服(若しくは之に類したるもの)若しくは絣の衣裳、書生下駄の流行、羽織、衣服の丈の短き、又は「ステツキ」の大なるを喜び、或は山高帽子よりも軍人帽子又は水夫帽子の多く流行せし事實、若しくは男子洋服の稍回復の傾向となりし事實、若しくは男子七分の三の髮風廢れて三分五分苅流行せし事實(これは日淸戰爭以前より流行せしとはいへ、益々其傾向を高めたり)ニセ金側のヒカ〳〵より鐵側又は銀側時計の行はるゝ如き其他詳細に記載するを要せず、多くの人の能く看破する所なり。

(第三)益々復古する事　流行社會が愈々復古の傾向を有するは今改めて申すまでもなけれど、昨年に至りては實に非常の進步を以て其勢力を

逞したり、之を實例に徴せば、譬へば德川時代の御奥の女中の持物さして流行せし「はこせき」の如き、昨年より流行せしものは大に改作したるには相違なけれども、其名稱と形躰を同ふする點より見れば、復古の傾あるを證すべし、又銀の平打簪の非常の勢力を以て流行し、平の直徑一寸五分以上に渉りしものを翳し、又縮緬の流行の如き、婦人帶止若しくは下駄の鼻緒、若しくはハンケチ若しくは羽織の裏、若しくは洋服襟飾り等皆其勢力を及ぼせり、束髮は愈々不流行にして却つて一種の社會に之を擬して大に野暮をてらひ又ゴム製の簪玉、根掛玉若しくは花簪安物の外は一切行はれず、珊瑚、瑠璃の珠大に氣焔を吐き、舶來的品物譬へば「トッパース」の如き寳石左手さなりたり、衣服は勿論日本服全盛を極め殊に婦人服の如きは大禮服の外は、有名なる吳服店に注文を受けずさいふを見ても知るべし、雨傘には蛇の目、履物は駒下駄、殊に雪駄大に行はれ靴の不流行は益々以て復古を證すべし、此外復古的流行の實例を擧ぐれば蓋し少々にあらざるべし。

此外に流行の傾向あるを疑はずさ雖も、其大綱目、大潮流に至りては實に以上に述べたる如し、記して讀者の瀏覽に供す。

　葬夢曰く本號には記すべき流行品尠からずさ雖も、編輯〆切に迫り讀者に孤負するもの多かるべし。



　前號の流行の渠中には極めて誤植多く、商家の細君を高家の細君さしたるが如き記者汗顔に堪へざる所幸に諒せらるべし。

日用品物價(一月十九日)

◎白米小賣相場　(一圓に付)一等白米八升一合●二等白米八升三合●三等白米八升八合●四等白米九升二合●五等白米九升六合

◎雜穀　●南京白大豆一斗八升五合●同青大豆一斗八升●同澁色小豆一斗四升三合●同白小豆一斗四斗五合●八戸大豆一斗八升三合●粕壁澁色小豆一斗四升●目無白さ一斗一升七合●木石上大豆一斗八升●南部大豆一斗八升五合●越後大豆一斗五升五合●室蘭黑豆二斗〇

◎鹽　●赤穗四俵〇●大鹽并に八家四俵一分●本齋六俵三分●新齋七俵二分

◎種油及石油　●胡麻十圓七十錢●桐油七圓七十五錢●荏油十三圓四十錢●地水九圓也●坂箱詰九圓九十錢●非桁九圓八十八錢●星印九圓九十三錢●一川九圓九十錢●久ト九圓八十五錢●伊勢箱九圓九十三錢●イ印九圓八十錢●チヤスタ一圓八十七錢●タンク一圓八十七錢●ホーキ一圓八十七錢

雑録

紅葉（下）

八萩生

奇人は歸り去りしが、とめ子は確と貰ひし紙を握り、寒霞溪の坂を下り歸りしが、母はとめ子の裝ひよりも、寧ろ、とめ子が話せし奇人の話を一層怪しめり、

母『誰だろふね……廣ひ板……箱……どーしても繪かきでなくてはならぬ。

母『ヤッーとめ、之は何だ、……御前に十圓を呉れた

とめ『十圓ッー

驚くも理りや、彼女は未だ十圓なる大金は、見し事なかりしをや。

翌日早朝、奇人はとめ子の家を訪ひ、昨日書し書を説き聞せ、更に廣板、箱、等は一々使用法を説し上、又もとめ子は昨日の如く、紅葉の衣物をつけて、奇人の前に立たしめたり。か丶る事、二三日なりしが、何日も〳〵とめ子をのみ、寫すにあらずして、益すとめ子を愛し、親しむに至りぬ、或日の事、奇人はとめ子に云ふ、

奇『御前の此繪はね、來年京都博覽會の美術館と云ふ所にかけるよ。

とめ子は如何に驚しぞ、京都にか丶げらる丶と聞きては、眼を丸し、口をあんぐりして、實に未曾有の事なれば。

其後數日にして、奇人は下村を去り、土の庄に出で、それより岡山三蟠港に便船して、岡山に出で、京都に歸れりと、知らず是れ京都の某美術家ならんとは、と

め子は某氏より惠まれし、十圓にて衣物を調へ、母子供、寒き冬も寒からず白屋に過しぬ、而も安樂に、悲む顏も去せて。

冬は遂に去りて、あくれば明治二十八年の春となり、京都なる博覽會の美術館には、秋風に吹き拂われし、紅葉をもて裝はれし、可憐の小女の額こそかゝれり。此額を見しものは、多く別に止まりて、見ると云ふ有様もあらざりし、繪の拙きにはあらねども、ア、斯も可愛く、愛度氣なく、裝ひし容色眼の小女を嘆賞するものはなきか、早や其日は會場も閉ると云ふ終りの時美髯蓬々として、金ぶちの眼鏡を透して見ゆる眼の玉、凛として、靜まりたる、半白の、肥肉肥大なる一紳士が、從者六七人を隨へて、入り來りぬ、ア、何者ぞ、彼こそ伯爵某大臣ならんとは、

大臣『これこそ美術館の寳物よ。

彼は之を云ひしのみなりしが、否々、とめ子の肖像―紅葉の服をつけたるとめ子の像は、うれしや伯爵某家の客間にかけられて、あわれ寒霞溪の一眼小女は、一度飛んで、伯爵に寵せらるゝに至りぬ、ア、是やとめ子が孝心の致す所か。

明治二十八年の四月一日は、如何に麗らかの日なりしぞ、とめ子の一家は此日こそ如何に煖かりし、彼の美術家某氏よりとめ子と其母とに、一通の書狀到達して、銀行爲替は、六十圓なる金高を記しぬ、而して曰ふ

『寒霞溪の女王さまへ』

其後又た伯爵家よりは毎年一百圓を惠む事すら云ひ送られぬ、是ぞとめ子一家が、福より福を重ねて、家ます〳〵榮ゆるの基なりき。

ア、是は誰のなせし事ぞ、とめ子が紅葉の衣物は、實に其基なりき、孝心より出でしとめ子の情は、天之を汲めり。

（完）

露營

（口繪の繪解き）

懸軍萬里海を渡て茫々はてしなき大陸に入る、雙脚を安んずるの地も敵土たり。家あれば家に宿し、家なければ野に臥す。滿州の山河我が遠征軍を拒んで、凜冽たる寒風鎬を削て來る。

我が遠征軍の敵と戰ひ、饑と戰ひ、疲れと戰ひ、寒氣と戰ひ、更に山河の險阨と戰ひて、北支那地方に轉戰しつゝあるの困難は、甞て其桶を家として露宿したりしといふを見ても其一斑を察するに足るべし。

看よ、此の希臘の古哲學者を學ぶ幾多の健見が、轉じ又轉じて靑天の覆ふかぎりを轉じ去らんとするを。虹の如き意氣は桶の底より吐かる。



史談

少年のナポレオン（一）

若し西人にして其傳記は多くの邦人よりも却て能く一般に知られたる者あらば、ナポレオンこそ其人ならめ。

此處にものするはナポレオンの傳にはあらず、少年ナポレオンの履歴にもあらず。唯近着の米國雜誌につきて、ナポレオン少時の逸事二三を摘する耳。該雜誌に載せたる新ナポレオン傳は、二十五年間數人の寄合ひて博搜勞羅せる材料を以て組み立てたるもの、頗る詳密にして異聞も少なからず。此處に摘するものは、其一顆一枝に過ぎず。

「コルシカ！　蕞爾たる一小島！　能く佛國をして大ならしむ」とは、ユーゴー翁の句なり。

然れど、佛國を大ならしめたるコルシカ島は、ナポレオンの生るゝ前までは、佛領にあらざりき。少年のナポレオンも亦佛國が兵力によりて之を併せし事を憤はれり。

余は我邦恰も死するの時に生れたり。三萬の佛人が、

自由の寶位を鮮血に漂しつゝありし慘怛の光景は、初めて余が眼に映れり。死者の苦叫、被壓者の呻吟、失望の涙は、余が搖籃を圍繞せり。

是れ廿歳のナポレオンが憤慨の辭なり。憤慨するもせざるも、ナポレオンの名が佛國に一大精彩を與ふるの運命は、自づから定まり居りしなり。天はゴール人の歴史に一段光怪陸離の章を加へむが爲め、特に一偉兒を降すの前に、先づ其搖籃を佛國に移しぬ。

* * * * *

ボナパルトの家は十六世紀の頃よりコルシカに住し、島中の歴々たり。

ナポレオンの父、名はカルロ、デ、ボナパルト。少壯伊太利羅馬地方に遊學し、ピザ大學の法學士たり。後コルシカの愛國者パオリーの秘書官となり、國勢救ふ可からざるを見て佛國に降り、後更に佛民となりぬ。ボナパルトの一族、自負心あつて貧困に、從つて怜悧敏捷なりき。ナポレオンの父も亦貧に堪へて屈せざるも、天性懶慢に傾きたりき。彼れ十八歳にしてレチチア、ラモリノなる十五歳の美人を娶りぬ。是ナポレオンの母なり。



ナポレオンの母は百姓の女なり。非常の美人なりき。

彼女、子女十三人を生み、良人は三十九歳に死したるも、妻は八十六歳まで永らへたり。彼女は一生百姓女なりき。強健、節儉、大胆にして感情乏しく、不運に恐れず、幸福に動かされざる女丈夫風の女なりきナポレオンが非常の忍耐力——精神的肉體的忍耐力は、明らかに其母より受けたり。

兄弟姉妹十三人。ナポレオンは第四子。一兄一姉三弟妹は夭し、兄ヂヨセフと三弟三妹は永らへて、其有名なる兄弟の榮華の夢に與かれり。

＊　＊　＊　＊

傳ふ、ナポレオンの母が其非常の子を産み落すの日、母は恰も禮拜堂にあり、急に産氣つきたれば、急ぎて家に歸りしに、何の用意を整ふる間もなかりしにより、遂に年少アチールズ（希臘史に有名なる力量無双の英雄神）を縫箔したる織物の上に生み落しぬ」と。是れ恐らくは、其利達發跡の後發明せられし傳説に過ぎじ。



ナポレオンの母

＊　＊　＊　＊

ナポレオン幼稚の時は如何にして過ごされしか、其消息を傳ふるもの甚だ多からず。

南太西洋の荒濤恰も鐵騎の長驅するが如く四方より寄

世來るセントヘレナの孤島に獨り寥しく垂死の病床に臥すの日、ナポレオンは同じくコルシカ人なりける侍醫某と、頻りに昔語りをなしぬ。

余は何物をも恐れず、何人をも恐れざりき。彼を打ち、此を搔き抓り、余は一家諸人に恐れられぬ。余が尤も干渉せしは、兄ジヨセフなりき。彼を打ち、噛み、罵り、彼が何の辨も殆んどつかざる前より余は彼を咎め、彼が己れと人を區別し得ざる前より余は彼を讒し誣したり。余は矯捷ならざるを得ざりき。母上ラチチアは余が喧嘩好の氣質を制せんと欲し、余が輕蔑的の倨傲を赦し玉はざりき。母上の柔和は嚴重なりき。賞罰を公平に行ひ玉ひき。功と罪と、二つながら計算に入れ玉ひき。

以て其一斑を知る可きなり。

＊　＊　＊　＊

ナポレオンの大叔父は僧にして資產もあり文字もありき。其子はナポレオンの叔父なれ共、年配多く違はずして常に遊び仲間なりき。ナポレオンは此十一歲の叔父よりアルフアベツトを習ひ、大叔父より聖書の或二三事實を學びぬ。六歲、ナポレオンは或女敎師の敎ふる小學校に登れり。他の生徒は、ナポレオンの靴下か常に靴の上に垂れ下り、ナポレオンが女生徒殊にキアコムメツタなる少女に忠實に事へたるが爲め、四方より之を揶揄しぬ。然も彼れは後年に及び露を打ち墺を拆き孛を挫き伊を蹂躙せし勇氣をもつて、スラツキ煉瓦手に當るものを引提げて打てかゝり、大勢の敵をも物の數ともせざりき。

是れ後年彼自から語る所なり。

文藝

述懷一首

敬亭生

筑紫なる母君病重しと聞ひて細君昨朝立ちしに、今

朝、母君永眠の報着しぬ。行先きの事も知らで、嘸車の歩もどかしく思ふならむと想ひつゞけて、

たらちねの母のなきから待つそとも
知てや妹子がいそぎ行くらむ

一月十六日

時事一斑

陛下煖爐を廢し給ふ

大元帥陛下、去ぬる日土方宮内大臣に仰せらるゝやう、『昨今當地の寒氣甚く侍從よりは時に煖爐新設の事を申出づれど、戰地の寒氣零點以下なりと云ふを聞き、從軍將士の艱苦如何に想ひ到れば、煖爐の有無など之を思ふの暇あらず。又此際例年の如く元旦の新年式を擧行するも望ましからざれば、朕は征清各將士の凱歌を奏して還らん日をこそ本年の元旦なりとは思ふべけれ』と。宮内大臣聖慮の難有に感泣し、直に有栖川總長宮殿下等の人々と審議し、こゝに宮内省第十二號達示を發して、新年宴會を廢止せられしと漏聞く。

恤兵の意始めて徹す

元旦を以て金州在陣の一軍曹よりの書中左の言あり。國民恤兵の意始めて徹せりと謂ふべし。

十一月三十日を以て毛布製の暖き外套頭巾及手袋を支給せられ、其後毛布、シャツ、袴下を支給せられ、倘又恤兵部よりは毛布一枚フランチルシャツ及メリヤス袴下并に紺足袋等を贈り寄せたれば、今や何品に於ても毫も不足することなく、寧ろ持餘す程に有之候。

戰地の病院

『余の入院せしは定立病院の野戰病院に交代せし第三日目なりし由なるに、院内の秩序整然として亂れず、余の室には廿四名の患者あり、何れも新調の藁布團を

布き四枚の厚毛布を供せられ枕子は新なり、火鉢は三四人に一個の割にて與へられ、身暖かにして室清く、殊に醫官は每朝診斷時の外午後にも一回巡視せられ、又夜間消燈時刻にも異常なきや否やを問はる、食品は上等の日本米にして、生乳あり、「ミルク」あり、「ソップ」あり、牛肉あり、豚肉あり、』とは、是れ我が第一軍の安東縣定立病院にありし病兵の言なり。以て我が戰地病院の事情を察すべし。

宗敎界の二大傾向

宗敎界の潮流批評の時代來るに伴ふて、次第に自由なり、次第に拘束少なくならんとすると同時に、次第に日本的のものとならんとするは數年來の傾向なりき。而して今や之に反對して、嚴然舊時の威嚴を維持せんと欲するの一傾向生ず。是れ基督敎界に於ける現象なり。而して佛敎界に於ても已に批評の時代來りつゝありて、將に同樣の二傾向を生せんとする如し。

個人の膨脹

支那に於ける我が占領地に航行する商船及び商賈に關する取締規則發布せらる。庶くは由て以て我が國家の膨脹と共に、個人を膨脹せしむることを得ん歟。

婦人共立育兒會

婦人共立育兒會は有栖川若宮殿下御息所總裁に鍋島侯爵夫人會頭たるもの。同會は征淸從軍者の小兒にして疾病に罹れるものは、醫科大學小兒科にて悉皆無料にて施療すべしと、橫濱に於ける同會幹事有泉孝子外三名の人々より、市役所各警察署へ施療券配付を願出たり。

大地震ふ

十八日夜十時五十分强震、死傷あり。京濱其中心なるが如し。

家庭雜誌第四拾六號附錄
(明治二十八年一月二十五日發兌)

文藝



賢母

蘇峰生

東京の片田舍、早稻田邊を往來するものは、疎林と平田との間を縫ふ一筋道に於て、恰も極樂の面影を描したらんと思はるゝ、氣高き老嫗の、侍女に扶け擁せられつゝ車を驅り行くを見む。

是れ則ち雄心精識、隱然一世の望を負ふ大隈伯の母堂にぞありける。

今や斯の老媼は音羽護國寺、風寒く霜冷なる暗宮に獨り眠りて亦た起きす。

* * * * *

◎請ふ少しく語らしめよ、余は斯の賢母に就て、何事をも知らず。但た其の子たる―偉大なる子たる大隈伯の口よりして、聞き得たる、而して僅かに記憶し得たる一二を語らしめよ。

◎大隈伯の北堂、彭壽院殿と申す。本姓杉本氏、名は三井子。大隈信保氏に嫁して、二男二女を擧く。文化三年三月六日を以て生れ、明治二十八年一月一日を以て逝く。享年九十。壽あり、德あり、福あり。

◎一生の功德は、篤く神佛を信仰したるにありき。扨て斯く篤信せられたるは、姑氏風疾を病み、その身躰自由ならず、病牀にある十四年。北堂看護怠らず、遂に佐賀城下より四里を隔てたる龍造寺八幡に徒跣詣りをなし、以て其の平癒を祈りたりしより始まると云ふ。

◎大隈伯十三歲にして父を亡ふ、北堂諸孤を鞠養敎育し、其の二女を嫁せしめ、その二子を學はしむ。而して家道之れが爲めに少しく衰ふ。北堂勤儉力行、毫も扶けを親族に仰かず、獨力以て之を恢復す。

◎北堂資性嚴正、故にその饗燕に臨むや、一坐肅然容を改む。故に親戚通家、少年狎媟、相ひ悅ふの徒、頗る之を憚る。

◎閑叟公の楠公祠堂を作るや、北堂その資を寄進す。楠公によりて大義名分を知り、又た尊王



(大隈伯爵)　(伯爵母堂)　(伯爵夫人)

の何物たるを知る。大隈伯の年少志を天下に立つるもの、此に基ひする多し。

◎大隈伯の長崎に遊學するや、北堂自から養蠶紡績の業を操り、其の學資をして、綽々餘裕あらしめたりき。

◎大隈伯の國事に奔走するや、其の家は則ち同志者の倶樂部なりき。北堂恒に之に處して、其の宜しきを失はず。江藤、副島諸氏の京都に往來する、北堂亦た嚢中を傾けて、之に供給したりき。

◎時事日に非なり、大隈伯亦た有司の指目する所となり、動もすれば鞫治せられ、刑辟に就くの恐れあり。北堂憂慮百端、然も敢て神色に出さず、敢て人に語らず、唯た神佛に向て、其の冥護を念ずるのみ。

◎大隈伯風雲に會し、維新の朝廷に立つや、屢ば北堂を迎へんとす、北堂遂に來らず。偶ま明治四年の廢藩置縣に際す。北堂曰く時勢既に定る、以て行く可しと。爾來東京に來り、家事を伯爵夫人に讓り、神を拜し佛を念ずる外、亦た世事に關せず。

◎既に神佛信仰の外他念なし、故に大隈伯の政治上の浮沈、流轉極りなきに關せず。一切之に處して其心を動かさず。十四年の内閣更迭、二十二年の大變皆な然りと爲す。

◎二十二年大隈伯の外務省門前に於て、狂兇の爆裂彈に罹るや、北堂之を聞き、夷然として曰く、一命には恙がなかりし乎。既に然らば直ちに見舞ふにも及ぶまじと。一週間後。始めて伯と

相見る、蓋し深く思ふ所あれは也。

◎神佛を信ずるや、敢て宗派の異同を問はず。一視同仁、毫も差等なし。既に篤信にして亦た寛裕。故に其の高僧、善知識、神官等に知己の多き、前後幾何なるを知らず。

◎朝夕其の家に勸請する神佛に供物を備ふるや、必らず自からす。而して野菜の如きは、手から細末に刻んで之を献く。其の精勤、老て倍〻衰へず。

◎晴天なれば必らず外に出で、神社佛閣に詣す。或は行厨を携て出遊するとあり。或は一日に兩度も出遊するとあり。

◎北堂の精勤は、特にその手から織りたる耦絲曼陀羅に於て、之を知る可し。觀音の像、弘法大師、前後一百餘幅。今ま伯爵夫人の一昨年米字の宴に於て、陳られたる祝詞に就て、之を見よ。

わが母とじ三井子は若かりしほどより神佛をふかく信じ身健かにつゝがなくて七十あまり七とせのよはひをかさねられしとし遊のいともて手づから育兒觀世音の御像をおりてかしこくも　后宮に奉りぬそのをり御歌たまはりしことの身にあまりかたじきなくよろこばしさにまたも日ごとにはちすのいとくり出しつゝ三年をへてさらに八十八の賀しけるをり弘法大師の御像の額をおりて寺々へ納め繼はせて神々へ奉りぬかくして老のこゝろざしをとげられたるがいと〱うれしさになほこのすゑもたひらかにすくよかにても、千とせをかさねられんことをいのりつゝひとことかい

つけおくになむ

老がみにつゆのみだれもみへぬこそ

かみのうけひしゝるしなりけれ

をほそらも千ひろのうみもひとつらに

おほふはのりのめぐみなりけり

明治二十六年と云ふとしの三月六日　大隈綾子

◎精力人に絶す、其の身邊の事、悉く自から之を爲す。衣服を裁するが如き、亦た自から爲す。而して其の餘片もて、或は巾着を縫ひ、或は胴着を作り、以て其の親近の子女に頒與す。

◎米字壽宴後、一切諸事を擲去し、其の鍵管すらも、擧げて伯爵夫人に渡しぬ。曰く百事了る、徐ろに神佛の冥護を祈らんのみと。

◎好んで軍書類を讀む、太平記、盛衰記、曾我物語の類、皆な爛讀する所ろ也。近年は唯だ邦語譯解の佛典を手にしたりき。

◎人に接する嚴にして恕、其の恩愛親近より奴婢に及ぶ。一たび其の左右に侍したるものは、終身其の恩に感じ、敢て忘れず。

◎毎月十四の緡錢を以て、神佛參拜の賽錢と爲す。道傍乞食あれば、必らず其の數片錢を投じて、之を與ふ。『早稻田の御隱居』は、乞食の親友也。

◎其の外に出るや、必らず手土産を携ふ。家園の野菜を車上に堆積して行く、而して足らざるあれば、必らず八百屋より購ひ行く。その購ふや、尤もさびれたる家に於てす。左右その品質の不良なるを説く、曰く否なさびれたる家より購へば、賣る者買ふ者、共に其の恵に頼る。品質の良否は問ふ所にあらずと。

◎手土産として鉋屑、木片等をば、燃附料として贈與せらるゝもありき。

◎北堂老ひて愈〻樂易愉色欣々として、面上掬す可し。其の無邪氣にして、眞率なる宛然として小兒の如し。伯爵夫婦、之に奉ずる、至誠にし



（早稻田庭園其一）

て息まず、一家和樂、恒に春風の如し。

◎老ひ去りて倍〻剛健、其の四肢諸官能、毫も衰へず、而して精神依然として耄せず。昨年春初腸加太兒に罹る。而して遂ひに快癒す。十月以來糖尿病に罹る、池田、橋本、青山、ベルツの諸醫皆な力を盡す。而して病亦た甚しきに到らず、易簀の前數日、男坂よりして愛宕山に上る。易簀の日、その皮膚光澤ある壯者の如し。

◎伯爵夫人、大隈伯の意を躰し、尤も承歡に努む。北堂之を視る尙ほ子の如し。其の病革りて、點滴咽に下らざるや、伯爵夫人自から肉汁を作り、之を枕邊に携へ、手から之を勸む、北堂欣然として之を飮む二匙。是れ最後の供養と爲す。

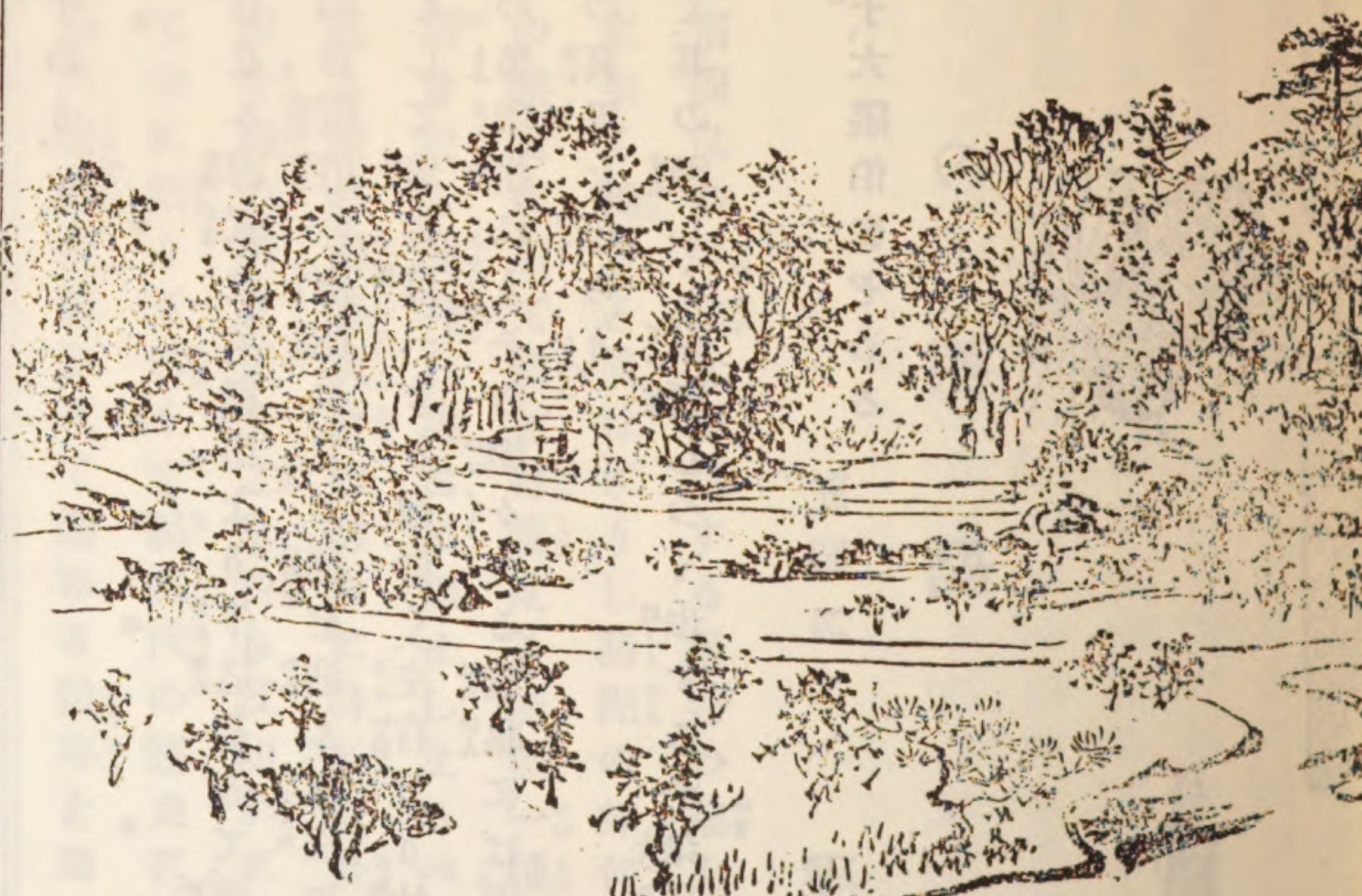
◎晩年意を世事に絶つ。然も昨年五月の頃とかや、一夜深更伯爵夫婦を、枕邊に招きて曰く、今や吉夢を見たり、我邦に於て朝鮮征伐ありて、大勝利を得たり、その事はしか〻なりと。伯爵笑て曰く、さらば明日は、御祝ひを致す可しと。今に於て其の不思議を覺ふ。何となれば其の夢の豫言的なるが爲めに。

＊　＊　＊　＊　＊

余は一月二日、大隈伯を訪へり。吊辭を陳ぜんが爲めなり。伯の深憂惻怛、殆んど余をして坐に堪へざらしめたりき。曰く『一家の主しを失ふたる心地して、何となく心淋しくなりぬ』と。再び一月十二日、伯を訪ふ。曰く『余若き時より母に劬勞を掛け晩年稍々其の心を慰めたるに、今や

渠を亡ふ。余に於て總ての樂を亡ふ也。余や身生幾多の不平、窮愁、厄難に逢ふ。然れども一たび母の顏を見れば、百憂頓に消へ唯だ一の藹然たる和樂あるのみ。今や則ち亡し』と。言畢りて霰の如き熱涙、その張開したる顴骨より顋邊に交る。余殆んど貰ひ泣きするを禁じ得ざりき。

彼れ其の信ずる所に據りて立ち。隻手を以て、全國に咆哮したる反對黨と戰ひ、其の外面味方にして內心、敵よりも敵たる同僚の隱



(早稻田庭園其二)

謀と戰ひ。遂ひに身を犧牲として顧りみず。爲めに其の反對黨をして彼の豪膽を嘆美せしめたる大隈伯にして。眼中光明あり、胸裡樂天あり。失敗の中より勝利を望み、厄窮の裡より好運を探り。人生未だ失望の何物たるを解せざる大隈伯にして此の如く哀痛惻怛の情に堪へざらしむるは何ぞ。

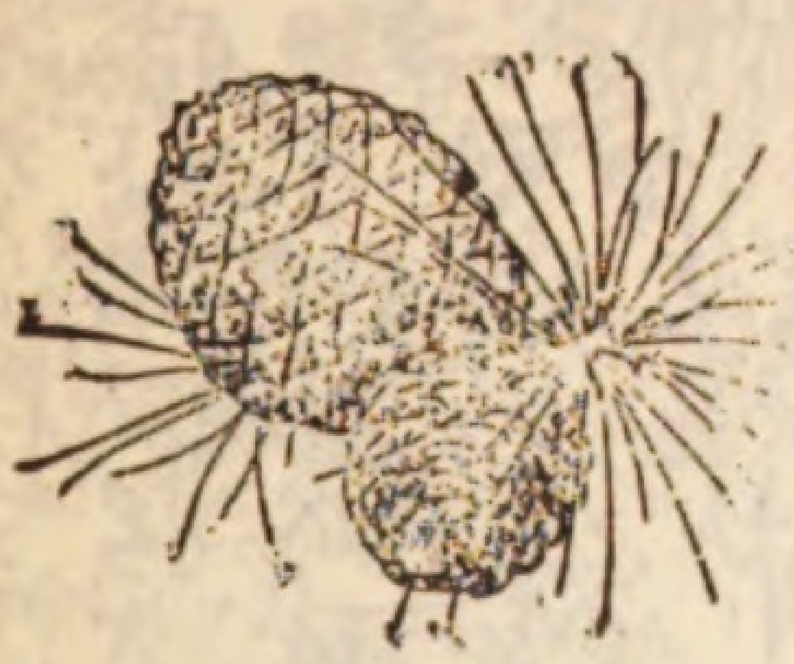
大隈伯の純孝なるが爲め乎、抑も賢母の賢なる、大隈伯をして此に到ら

しめたる乎。斯母にして斯子あり。

* * * * * *

明治二十八年一月六日、稀有なる葬式は早稻田より牛込を經て、音羽護國寺に達しぬ。會葬者八千人、幾多の先着者は護國寺磴道の兩側に立て柩を迎ふ。柩後に白衣黑冕の葬裝を着けたる、一個の偉大なる人、蹣跚として歩に堪へざるが如く、左右より扶けられ、石級を上り來る。其の廣敞なる前額には、萬重の愁雲掛れり、その烱々たる電眼には雨氣を含めり。其の一世を喝破する巨唇には、千言萬語の哀思を包めり。彼の兩側の來迎者に對して、其の微しく點頭しつゝ歩するや。衆皆な凄然として、敢て仰ぎ見る能はざりき。

彼は申す迄もなく、賢母の子、大隈伯にぞある。





支那の落語

笠岡にて　愚軒居士

日清の戰爭は諸君に日清兩國民の平生を說明する最善の鑰を與へぬ諸君が曾て兩國民の歷史及び小說を讀みて心に全く曉ると能はざりし諸點の如何に今回の戰爭によりて全く了々したりしぞ我が國民の歷史に於て幾ど每葉見る所の一種特有の醇乎醇たる勤王心は今回の事によりて當さに活きたる註釋を諸君に供せしなるべし我が國民の歷史に於て多くの年代を隔てゝ稀れに見る所の對外戰爭の每ねに符節を合する如くに我が國民の勝に歸して終りし所以は諸君が今回の事を以て之を料らば明かに其の原因を會するに難からざるべきなり某史論家嘗て余に語りて曰く支那古代の歷史に「散卒を集む」といふと屢ば有り牙山平壤の役に於て支那兵潰敗の狀を見て謂ゆる散卒を集むるの何の義たるを始めて

暁るヿを得たりと余をして單に半部の水滸傳を把りて之を證さしめよ國民新聞の松原氏が權りに百夫長となりて朝鮮の擔夫を統督せし記事を讀めば諸君は楊志が生辰綱を監押して東京に赴く途上一段の苦辛懊惱の宛然實際實事として頭中に再現するを覺えざる乎報知新聞の六々居士が聞書きせる某通譯官の服を變して金州城に往諜せる一篇の紀行を讀めば諸君は石秀が賣柴者となりて祝家莊に潜入せし情景歴々として目あたりに睹るが如きを覺えざる乎福原楠内二氏が寃を呑みて南京に斬に處せられたる前後の無慙なる始末を見ば諸君が平素架空夸大の言として等閑に看過ぐしたる彼方の獄裡と法場との慘酷野蠻乃至幾多の管營差撥幾多の董超薛覇は悉く皆な實物を活寫したる實錄なるを知るべきなり

蓋し清國民の精神の腐敗は既に一日の事にあらず若し渠等にして舊物舊式に依遵して絶えて之を改むるヿを知らざる不思議の保守的氣象と勤勉儉約以て儲蓄に孳々とする不思議の經濟的天性と有ると無からしめば渠等謂ゆる中華は應さに已でに久しく解躰亡國したるべきなり頼ひにして渠等特有の保守的氣象は一たび定まりたる社會の秩序を變動するヿを肯ぜず譬へば家屋の柱楹梁桷悉く朽蝕して皆な既に中虚となれるも其のイクヰリブリアムを擾だす所の者ありて其の平衡を失はしめざる間は家屋は依然として其の形躰を維持するを得るが如し渠等が勤勉儉約にして儲蓄に熱心なるヿは渠等が昔時爪哇の移

佳地に於て亦た近時亞米利加及び横濱神戸の出稼地に於て歴々其の證を示す所にして僅かに幾十百年前までは塞外の棄地として彼方の廣輿圖にさへ多く其の名を識られざりし滿州の末界に忽ち安東縣の如き殷富なる市邑を出現するに至りしは斯の不思議の感服すべき天性の致す所に外ならず渠等が一面には放蕩淫逸殆ど至らざる所無き亡國的狀態を具ふるにも拘はらず猶ほ其の社會の能く收拾すべからざるまでの荒豫壞敗に陷らざるは其の一面に勤勉儉約の美風良儀の道德的制裁に代りて遊惰を戒抑し社會の紀綱を振肅する者有ればなり

諸君は嘗て支那の落語集を讀めりや落語は最も普通にして最も機警なる諷刺家なり試みに一たび其の談ずる所を聞け彼方社會の裡面の消息は直ちに歴々として諸君の眼下に躍り出づるを見む請ふ余をして其の一二を指點せしめよ

此ごろ支那人の虜となりて我邦に在る者皆な無學不文にして能く自から姓名を記する者幾ど百に一二なきは我邦人の皆な驚き怪む所なり蓋し彼方の人は大抵分ちて二種族となすを得べし一を讀書的となし他を不讀書的となす讀書的は平素書を讀み文を誦するを以て業となし其の最後の目的は官吏試驗の募集に應じて進士及第を得むと欲するに在り而して其の官吏たるを願はず謂ゆる意を功名に絕ちて農工商一般の平民となる者は書を讀む者有りと雖も極めて希れなり今ま虜となりて我邦に在るもの丶如きは概むね皆な彼方

にありても亦た無頼の惡少と稱するものにあらざれば則ち市井の貧賤なれば固より其の無學不文なるを怪しむなしと雖も彼方の上流紳士謂ゆる富家翁にして亦た無學不文のもの多きは落語家の毎ねに取りて以て其の材料となす所なり

『ある富翁の許に手紙を以て牛を借りたしといひ送りしに主人は恰かも來客と對話中なりしかば己れの無筆なることをかくして勿躰らしく對を啓き之を視畢りて使に向ひ「承知しました、少刻參上いたします」と』是れ取りも直さず主人自身に牛になりしを謂ふなり牛とは無能にして肥えたる者を嘲稱する隱語なり

『ある富翁人に壹といふ字は如何に書くぞと問ひければ其の人對へて草かぶりの下に一の字をかき次に田の字をかき又た一の字又た田の字又た一の字といひしに富翁自から「草壹田壹田壹」とかきて暫らく之をながめしが「おれを詐にして、是れではまるで五重の塔だ」と』

『ある人富翁に勸めてせめて其の子には字を敎ふべしといひしにより師を延きて之を學ばしめしに先づ一の字を學ぶに是れ一畫なり次に二の字は是れ二畫次に三の字は是れ三畫なり其の子大に喜んで父に告げて「字といふものはモウすつかり曉りました、モウ先生も何もいりませぬ」と父も大に喜で早々師をことわりぬ一日父萬某といふ友だちを招くとて子に案内狀を書かせしに朝より書きはじめて午すぎになりしも出來ず父往て之を諭へば子は大汗を拭ひ〳〵「苗字も多いに萬とは何といふ不都合の苗字ぞ、半日かゝッて未だ五千畫し

か書けませぬ」と」

彼方上流社會の字を學ぶ者は多く一定の報酬を以て一個の教師を雇ひ之を已れの宅に寄宿せしめて以て之を學ぶ謂ゆる舘師なるものなり水滸傳に吳用が阮小二を誑くの語中に小生如今在一個大財主家做門舘といふもの即ち是れなり然れども此の如く一個の教師を已れの宅に雇ふは十分の資力有る者に非れば能はざれば他の資力足らざるものは或は近傍の富家にたのみて其の雇ひたる舘師の餘暇を分ち借りて其の子弟をして往て之に學ばしむる者有り或は公衆に向て特に設けられたる私塾私學校に就て之を學ばしむる者有り是等の私塾私學校の教師謂ゆる學究村夫子は多く官吏試驗に失望し若くは絶意したる老書生にして吳用が實際東溪村に於て作せる生活は即ち斯の私塾教師なり渠が晁蓋の宅に往かむと欲して其の家ぬしに言ひのこす語中に學生來時說道先生今日有幹權放一日假といへば則ち其の常に若干の通學生を有するとを知るべきなり是等學究並に舘師の過半は大抵僅々幾許の字を識りて隣人より多少の尊敬をもて待たるゝとを除く外無學無知世事に殆ど些の交涉も無き朴魯閑散の人にして其の社會上の地位身分恰かも我が維新前の寺子屋師匠の多くと科を同くするものに似たり近日我が通譯官等の金州近傍にありて擢見せる渠等の幾個を觀ても以て其の一斑を推すべし

彼方の落語家いふ『ある先生畠のほとりを散歩して農夫が菜に下こえをかけるを見て人の

吃べる菜に斯やうなる穢き物をかけるは如何といふ農夫對て之を澆がねば苦菜になりて口に旨からずといふ一日膳に向ひしに會ま苦菜あり先生一と口吃べかけて「是れは苦い、些し下ごえを持て來てかけてくれ」と』是れ此方の落語にある大名が「下ごえを少許血にもッて參れ」と符節を合はせる談なり

『弟子先生に向ひ大學之道といふは如何なる義ぞと問ふ先生酒に醉ひしふりにて「それは又た索面のときに敎へてやらう」とその夜其の妻に之を問ふ妻敎へて大學とは書物の名また之道とは其の書物の中にかいてある道理なりと次の日先生弟子に向ひ昨日は醉中故に言ざりしが大學之道といふとは云々なりと妻の敎へたる如く言ふ弟子「それでは次の在明明德と申すは」先生急に額をたゝきて「待てくれ、醉がまだ殘ッてをるやうだ」と』

『よく謊をつく男親類の家に往きて已れの家には三つの寶もの有り即ち一つの牛あり每日千里づゝあるく一つの鷄あり每更に時を報ず又た一つの狗あり能く書を讀むと親類のもの駭きて明日ゆいて之を看たしといふ男歸りて其の妻に之を語り如何にして謊をかくさむかといふ妻心得て翌日親類の來るを待ち夫は今日早朝北京に往きて不在なりといふ幾時もどらるゝやと問へば二三日の內といふ何故にかく速かに往返することを得るやと問へば一日千里づゝ走る牛に騎りて行きたればといふ又た每更に時を報ずる雞有るよしと問へば適ま啼ける午雞を指さして是れなり但た夜間時を報ずるのみならず晝間はじめての

客來れば亦た之を報ずといふ親類書を讀む狗といふは妻他人でないからお話し申します宅も不如意で御坐いますから口をさがして舘師に出しましたと是れ一面には舘師なるものを嘲弄して即ち讀書狗なりといふなり狗とは猶ほ此方にて穀つぶしといふに同じく人を賤稱する隱語なり

『舘師歳の暮に主人の家を辭して舟を傭ひて家に回へる舟子「相公はお幾つで御坐います」舘師「狗の歳で、あければ五十になる」舟子「私くしも同じ歳で御坐いますが同じ狗でも大きに身分のちがッたもので御坐います、相公は幾月のお生れで」舘師「正月」舟子「それで分りました、相公は正月で狗の頭私しは十二月生れですから狗の尾、だから私しは一世これ搖狗の尾をふるをも搖といひ舟子櫓をこぐをも搖といふ相公は一世これ敎狗のほゆるを叫といふ敎叫同音なり」と』

凡そ此の如きの類枚擧するに遑あらず而して舘師の地位は不遇なる老書生にとりては頗る熱中希圖する所の地位なるが如く各自皆な之を得むと願ひ欲するに熱心するは猶ほ此方の田舍の無能書生が下等官吏の地位を得むと願ひ欲するに熱心するに同じき者有るが如し玆には唯だ其の笑話の一例を擧げむ

『乞食が錢を盛る竹筒を新たに製らえたりとて仲間の乞食打よりて酒を沽ひて之を祝し口口に慶新管を呼はるほとりを一先生偶まとほりかゝりて新舘を慶すと聞きまちがへ急に立ちよりて腰をかゞめ「列位には新舘がお出來になりましたのなら情願その舊舘の口を私

しにお譲りくださいと』

彼方の讀書的種族が官吏の試驗に應するには童生秀才擧人進士等の諸階級ありて順次に之を歷躋せざるべからず故に若し不幸にして童生の試驗に於て毎回之に應して毎回志を得る能はず選に外づるゝ者は其の名は童生と稱しながら其の首には既に白髮を戴く者さへ甚た希れならざるなり

『童生考に赴くとて鏡に對ひて鬚を拔きながら「ウヌ、我を世に出さないうちは我も決して貴様を世には出さないぞ」と』

『老虎山にもどりて肚がへつた〳〵と呼ぶ群虎とりまきて今日は一個も人に遇はざりしやと問ふ老虎遇ひたれども食はざりしといふ其の故を問へば始め一個の和尙に遇ひたれども臊さい氣がして食えず次に一個の秀才に遇ひしが酸ばい氣がして食えず最後に一個の童生來りしが亦た得食はざりしといふ何以と問へば「硬くておれの齒が毀れさうだつたから」と』

隨園詩話に七十の老翁始めて童生の試驗に登選せる歡喜と諧謔とをまじへたる七律一首を載せしを記臆す彼方にありて實際有る所の談なるを知るべし是等童生をはじめとして一般の官吏志願者即ち概して秀才と稱する者の皆な心術汚下識見卑屈にして其の人の世事に迂濶に其の文章の社會に用無きは彼方にありても具眼者の夙に識破せる所にして水

滸傳の評中金聖嘆が隨處口を極めて之を罵しると寺門靜軒で江戸繁昌記に於て我が文政天保の儒流を罵しりたるに同じきを觀ても見るべきなり故に落語家が秀才を輕詆慢侮して嘲弄至らざる所無きは又た我が川柳者流が居候に於けるよりも甚し唯た奈何ともする無きは其の嘲弄の仕方極めて口ぎたなくして糞土も啻だならざれば余が諸君のために茲に之を談せむには其の語あまりに不作法なり但た其の最も痛快なる者の一つを千百の中より抜きて其の片鱗を嘗みしめよ余は重ねて諸君に謝す請ふ其の語の不作法なるを恕せ

『一秀才死して閻魔の廳前にひかれ已れの博學にして古今に綜通せるを供陳するをりから冥王偶ま一屁を放てり秀才とりあへず即時に詞を進めて云く

伏して惟みるに大王高く金臀を聳やかし洪ひに寶屁を宣べたまふ依稀乎として絲竹の聲彷彿乎として麝蘭の氣なり臣下風に立ちて馨香の味に勝えず

冥王大に喜びて更らに一紀即ち十二年の壽を與へて娑婆に蘇生せしめぬ期に至りて秀才再び死して地獄の門にいたり「どうぞ大王に先年屁文章を作りました秀才が參つたとお取次ぎください」と』

今日支那の軍人が平生射藝を習ふを以て第一の務めとなし謂ゆる武弁の試驗には弓箭を以て最も重もなる科目となすは是れ言ふまでもなく弓箭が第一の利器たりし古代の規則

を因襲膠守して世と共に移るを肯せざるの致す所なり然れども清朝勃興の初めに方りては兎に角に軍人は一般に是等古代よりの風尚と奨勵とによりて一般に射藝に熟したる者多かりしに似たり正保中越前の商舶三隻滿州に漂到し其の乘組員の北京より陸路朝鮮に護送され宗對島守の手を經由して本國に歸りたる者の語る所に據るに渠等は先づ韃靼人即ち滿州人の騎馬の狀を言ひて

『馬自由自在に候事なか〳〵可申樣無之日本より參候ものども馬に乘り候事下手に候へども馬自由に候ゆゑ心安くのり申候鞭を見せ候へば一文字にかけ出し止め度ときは手綱をはなし候へば其まゝ止まり申候脇へ切るゝ事も無之候何程かけ廻りても息する事も之れなし斯の如く馬自由ゆゑか韃靼人は馬にて山阪がけ道自在にかけ廻り朝より晩までせめ乘り候ときは草も水も飼ひ不申よし夜馬を休め候ときは粟稗のからを飼ひ申候大豆を飼ひ候には粟がらを細かに切り候て大豆にまぜ飼ひ申候米無き故糠も無く候馬はきんを扱き鼻をさき申候荷鞍は一切無之乘鞍は荷もつけ申候』

又たいはく『武具は弓第一と見え候弓の長さ四尺許ほど有之唐の弓とて日本へ渡り候物儘にて候每日弓のけいこ馬上にても自由自在に射申候的をも射申候馬をかけさせ前後左右自由に射申候箭を馬上より取り申候十間にても二十間にても外れ候箭は希れなり覿ものに御座候』

然れども自後世漸やく太平に向ひて軍旅の事次第に稀れなると火器火藥の用愈よ開けて弓箭の用益す廢するとに隨ひて軍人の射藝は徒らに一種の虚飾となり了れり

『官軍の大將出征して敗ぶれかゝりしとき忽ち神兵降り來りて弱方を助け反て大勝となりしにぞ大將叩頭して何の神さまなれば此の如く危きを救ひたまはりしやと請ひ問へば神我は是れ垜子の神なりとのたまふ拙者に何の徳ありて垜子の神さまのお救ひを蒙りしやと請ひ問へば神「其方が平生教場にてちよッとも我に傷をつけぬを感じて」と』

嘗て北京に遊びたる者は定めて彼方の兵士が毎朝城邊の隙地に於て異樣なる態度して奇怪の聲を發しつゝ弓箭のけいこするを睹て不思議の感を作したるとあらむ若干年前一大臣弓箭の今日に用無きとを言ひ武弁の試驗には射藝を廢して之に代ゆるに操銃操砲の科目を以てせむとを建議したりしが舊物舊式を緊握して決して之を釋すとを肯ぜざるとに於てジヨンブールよりも更らに頑固なる支那人は斥ぞけて之を聽かざりしなり

支那の官吏の一般に貪婪にして私曲多きは萬人皆な知る所にして其の笑話の材料となれる者も亦た一にして足らず

『農夫茄を種ゑしに活ざりければ計を老圃に求めしにそは易き事なり其の根に錢を一文づゝ埋めよといふ何故と問へば錢のある者は活て錢の無い者は死ぬる」と』

支那の笑話に就て最も著るしく感ずる所のものは家庭の風儀の太はだ放縱なると是れな

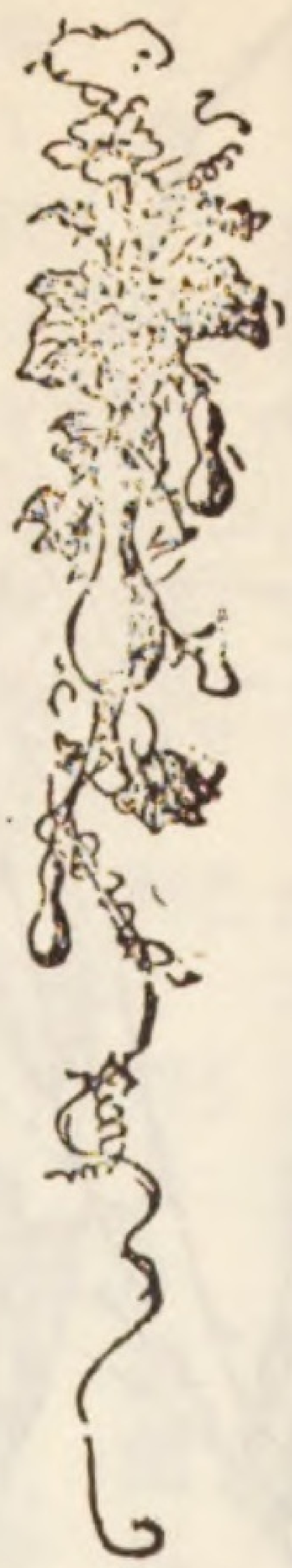
り余は玆に其の例を舉ぐる能はざるのみならず其の目を掲ぐるさへ不愉快の思ひをなすと無きを得ず曰く有夫姦曰く諸種の有親姦これ等は皆な落語家が以て第一の材料とする所なり若し彼方の家庭の風儀にして概ね清粛穏和にして是等の不祥話頭をして眞に稀有のものならしめは尤も普通の同情を惹くを主眼とする所の落語にして爭かで是等の稀有の事を把りて第一の材料とするとあらむや其の第一の材料とするに由りて之を推せば以て是等の不祥話頭の即ち彼方の家庭に於て必ずしも稀有ならざるの事なるを斷すべし試みに看よ此方の落語集に於て醒睡笑の如き優雅なるものは姑く論ぜず其の最も卑瑣のものに在りても嘗て何等か一個の有親姦の如き亂倫の事を把りて其の材料となしたる者ありや萬に一も除外の例ありて材料となしたる者有りと假り定むるも之を用ひて以て聞く者の同情を惹き其の破顔解頤を博し得べきや否やデカメロンを讀みて昔時東方歐羅巴の俗尙の修らざりしとを想ひアラビアンナイトを讀みて中古西方亞細亞非基督教徒の習氣の極めて濁りしとを想ふ者と雖も支那の落語集を讀みて其の風儀の太はだ放縦なるに驚くが如きの甚だしきとはあらじ

然れども支那の落語集に於て又た必ず特に掲げ出だすとを遺るべからざる一條有り即ち家庭に於ける女子の勢力是れなり支那は女子の權利を認めざるの邦なるが故を以て女子は家庭に於て烏有なるべしと速了せば甚だ謬まれり啻に烏有にあらざるのみならず歴史

の上に著るしき呂后武則天の類の小さき者は平生亦た屢ば市井閭巷の家庭の中に看出ださるゝ所なり謂ゆる怕婆者或は懼内者或は居常妻のために使役せられて其の制を受くる所の夫は落語家の毎ねに取て其の談資とする所なり

『細君の鞭撻使役に堪えかねし懼内者十人打ちよりて血をすゝりて盟ひを結び互に相助力して其の妻の壓抑に抵抗せむと相談最中へ何處にて聞き知りけむ十人の細君一齊に推し寄せたるにぞ一同驚きて八方に逃げちりしが唯だ一人のみは正坐したるまゝ動かず九人のもの返り來りて皆な私かに感服し此のものこそ一同の首領として然るべしと思ひつゝ近より視れば早や疾くに驚えて死ンでゐた』

渠等は女子の權利を正則に認めざる結果として一面に於て其の勢力を變則に展ばさるゝを自から悟らざるなり蓋し人は剛性柔性に論無く到底無一物として取扱はるべきものに非ればなり





ゆり子がふる里　湖處子

いさ子達、今日は如何なる話をすべきや。此間國に歸りし御身たちの愛する友、ゆり子がふる里を話せとか。それこそいと〳〵面白かるらめ。さらば今日はゆり子がふる里を話すべし。さらば子達は、昔乳母の背にて「海山越て里へ往た」と聞き玉ひし如く、ゆり子と共に海山越て、はるばる里に往きたるものと思はるべし。

さて何からか話すべき。まづゆり子が家から話すべし。子達の知らるゝ如く、ゆり子が父は田舍の豪農にて、其家は町はづれに立つたる、瓦屋根の二階づくりの、白壁ぬりの家にて、ゆり子がふる里にては、一番立派で大きく高き家にて、遠方から、何處からでも、あれがゆり子の家とは知られぬ。

家を繞つて、青く茂れる森もあれば、艸花さきたる花壇もあり、ひろ〳〵たる乾場もあれば、水

鳥浮へる池もあり、牛羊戯れ遊ぶ牧場もあり。その森の眞中に、青き空に聳えたる一本杉の梢に、此あたりの鳥巣をくひ、毎朝人の未だ起きぬ時、ゆり子が耳に「カー、カー、起き玉へ、カー、カー夜はあけぬ」と呼びつゝ四方に飛て散り、夕になれば、四方の空より又其一つ梢に歸り來り、四方の野邊を見下し、遠近の農夫に告げて「カーカー休み玉へ、日は暮ぬ、カーカー我等が如く休み玉へ」と叫ぶ。鳥の靜まり果たる後、やさしきゆり子は常に思ひき、農夫が各々我家に歸り、寒き夕爐邊に聚まり、あるは温き寢床に臥せるが如く、鳥も亦其巣にありて、如何に樂しかるべきかと。されど雪ふる夜中に眠りかねて、カーカー騒ぐ聲を聞けば、布團の中に竦として、鳥の寒さを思ひやりぬ。

其森を出づれば、廣く且つ草青き牧場あり。彼處に、此處に、牛羊簇をなして、自由に遊べり。其牧場を廻る小路を、一直線にたどりゆけば、遠からずして、又一叢の森に出づ、其森の中を、靜かに流るゝ、清き甘き冷たき小川あり。暑さに疲れし農夫どもは、皆此處に來りて、面の上の汗を洗ひ、兩手に掬ひて、渇ける喉を癒し、野飼の牛羊共も、亦日に幾度となく此處に來りて水を飲み、時として又樹蔭深く水淺き處に下り立つて、涼み居れり、

水は猶ほ樹枝の最も深く入り交れる樹蔭に深く留まり次第に淺くなつて、流を分つ飛石の間に、細かなる綾をなしつゝ、明るき森の外へと向つて駛れり。ゆり子はこの處に來たり、樹の根に坐りて、流れを見るを好めり。かの女が始め此の處に來り、始めて水に向ひし時、水底にも、

美しき小さき女の子があつて、熱心に自分を見つゝあるを見とめぬ。此方が不審と見つむるほど、彼方も不審と見つめたりき。これは不思議と走せ歸つて祖父に斯くと告げぬ。祖父は水中の影の彼女自身の姿の反映なることを說き聽かせしも彼女は聽かず、是非にと祖父を誘ひ出し、祖父をして水に臨ましめ、祖父の目鏡面が水面に顯はるゝを見て、始めて水鏡と云ふことをさとりぬ。然れども猶ほ不思議に堪えず、それより後四五日間は、いつも來りて其顏を寫したるが、かの女は、是に由つて面白き眞理を學びぬ。如何子達あてゝ見玉へ。然り然り、かの女は始めて自分は水の底に見ゆる樣な、美くしき優しき可愛らしき少女なりと云ふことを此水鏡にて學びしなり。

是よりゆり子が祖父の話をすべし。ゆり子が祖父は、最早八十の坂を越えたる老人にして、ゆり子か家庭に於ける唯一人の友は此老人なり。祖父はいつも誕生日の祝が來れば、ゆり子に玩弄道具の贈物をなすの例なりしかば、ゆり子が財產に富めると、近處の女の子と戯るゝ時、いつも玩弄店して遊ぶほどに、澤山の物持なりき。

祖父の方が多く孫を愛するのか、孫の方か多く祖父を愛するのか、それは中々判斷すると難かりしも、二人ともいつも〳〵中好く、諍ひの起る樣な事は決してなかりき。そしてゆり子が近處の友達と、話をして聞かす樣、祖父を說き落したる時は、中々の樂なりき。其の時子供は一同、冬なれば圍爐裏の傍、夏なれば樹蔭の下に、祖父を伴れゆき、祖父を取り卷いてその話を聞

きぬ。大方は子供の方から其話を注文するも、然らざる時は概ね祖父自身の若き時の冒險譚なりき。これは祖父が五十年前、一たび水兵にてありし故、軍艦に乘つて、數多の國々島々へわたり、又此頃の、豐島や海洋島にて、チャン／＼坊主の船を擊ち沈めたる樣な、名高き戰に昔出で、澤山手柄立てたりし故。

さて又祖父とゆり子と、唯二人の時には、二人で遊びぬ。如何にして遊びたるか。其時ゆり子は祖父となり、祖父が代つてゆり子となるなり。其白髮頭の祖父のゆり子は、如何に可愛きものなりしぞ、かれが皺枯れたる猫なで聲にて、ゆり子の祖父に、祖父ちやんおまんと、骨と皮の手を合せてさし出す時、ゆり子の祖父ちやん、如何ばかり腹を抱へて笑ひしよ。又ある日の事なりき。ゆり子は一人にて、最も好く祖父の風を裝はんと、祖父の煙草入を持ち出したりしが、忽ちに煙にむせびぬ。可憐なる少女なるかな。ゆり子は又と決してそを試みざりき。

余はまたゆり子と祖父と、相扶けて出づるを見たり。既に老いて衰へたる足と、猶ほ小く纖弱き足と踉めきながら走るを見るは甚だ面白きとなりき。二人の最も好める遊びは、嚮に語りし小川流るゝ森の中の散歩なりき。こゝにて渠等は飛石を渡るを以て、一番の樂となしぬ。最初には祖父が案内者となつて、ゆり子を伴ひ渡したるが、今は却てゆり子が祖父を導きぬ。この老人と小兒が手を執りあいて、其覺束な足取もて、危ふきを冒して樂しむ樣の如何ばかり面白き見物なりしよ。

さて余は是よりゆり子の兩親の事に移るへきが、其父に就ては話すべきといと少なり。そは父なる人は多忙の人にて絶えず訪ひ來る人に逢ひて、ゆり子か友たると祖父の如くならず かれは親なれは、ゆり子を愛するとは勿論なれども、彼女と遊ぶべき時間を多く持たず、かの女の教育については、一切其母にうち任せぬ。

母は日課をゆり子に修めさすへく、毎日時間割を與へ、日課の終にはゆり子に能く記えて、再び語らしむる樣、面白き物語の本をかの女に讀みぬ。もしゆり子か空耳し、脇目ふりて、聽かざりしならば、然る時には、彼女は一の話を、母に話し聞かすとも出來ざりしならん。されど母は、成るへく面白きを擇みて、讀みきかす故、少女は終りまて倦むとなく、いかなる長き話にても、いつも短かき心地し、終るとに、早終りしかと問ふほとなりき。これかゆり子か、世界に一番愛する母と共に費せし、最も幸福なる時間なりき。

是よりゆり子か親戚を語らん。ゆり子か多くの友達の中、最も睦ましかりしは、ゆり子か家より、一里離れたる親戚の四人の子供にして、其年かさなりし二人は男の子、幼き二人は女の子なりき。男の子の一人は誠と呼ひ、一人は富雄と云ひ、既に小學校の生徒なりき。二人の男の子は、ゆり子と遊ふとを少しも嫌はず、女の子と云へば、男の子は兎角虐めて樂しむものなるが渠等は決して、さる惡戯をゆり子にせざりき。誠は實に怜悧なる子と稱せられ、學校に於ても其同級に在つて、大概第一番の位を占めぬ。渠が人と異なる處は、何事を見聞しても、熱心に意

を注ぎ、自分に解せざる事は、必らず人に尋ね、人に尋ねて猶ほ心に落ちざる時は、學校に持ちゆきて教師に問ひ、必ず心に納得するまでは止まざりしなり。されば渠は毎夜多くの友達が、竹片ふつて遊ぶ間に、獨り靜に橋の上に立つて、熱心に星を眺むるが常なりき。彼は猶ほ幼なけれども、日と月と星に就ては、既に子達が問ふほどの事は說き明し得る程のもの識なりき。誠は實に學者となるの道を踏めり。渠は他日學者となるべしとは、教師仲間の評判なりき。

此の望ある少年大人しきのみならず、亦甚だ大膽なりき。余は渠等が濱邊に下りて遊びし時、誠が爲せし所を子達に語らん。ある日、誠と妹と、ゆり子と、三人伴にて、干潟に出で、貝拾ひつゝ、濱邊の岩を、あちらこちらと亙り居りしが、思はぬ間に潮滿ち來りて、岸より遠く渠等を離し、看る〳〵岩は小島となり、水は殆んど腰までにも及びぬ。ゆり子は恐はさに叫び出しぬ。其時誠は右手を以て、ゆり子を確と胸に懷き、左手を以て妹を導き、安全に岸に着きたり。此時誠が臆病なりしならば、若くは狼狽したりしならば、渠等は危ふかりしならん、そは潮の滿つるは甚だしく速かなれば。

富雄は誠の勉強家なるに反對して、遊戲の外は殆ど好むものなく、問題の解けぬ時は、いつとても野に出で來り、青草の上に寐轉び、頰杖をつき、兩足を跳ね揚るの外は、何事もなすと能はざりき。

富雄はかく無懶ものなりしかと、また至極面白き兒にて、常にゆり子に親切なりき、一日かれ

はゆり子と共に、森の中を歩みつゝありしに、何處よりか啄木の音聞えければ、渠等は一時に立ち留り、靜かに耳を澄しけるに「コツ、コツ、コツ」渠等の面前に響きぬ。富雄は逸早くも五歩ばかり離れし木の根を、つゝける背青く頭赤き、啄木鳥を看出しぬ。鳥は少しも人の來たるヿを知らざるものゝ如く、コツ〳〵〳〵と餘念もなく啄き居れり。富雄は忽ち片手をあげ、忍び足になつて往くを、ゆり子は其手を執つて引止めければ、富雄も舉げたる手にて頭搔き〳〵、その可憐なる鳥を驚かさぬ樣、再び忍び足にて立ち去りぬ。かく富雄は、ゆり子の云ふ事を聞きしが故に、かの女はかれを惡き兒と思はざりき。

富雄はなまけものと、學校にての評判なれど、決して惡なる兒にはあらざりき。渠はゆり子と其妹の仲間に加はりて、學校の出來事に就て、面白きヿ、可笑しき事、奇妙なる事を語りて、彼等を驚かすヿを好めり。かれが妹は「虛言、虛言」といつも笑つて打ち消せど、ゆり子にとりては、珍らしければ、今一つ今一つと、富雄を捕へて離さざりき。

さて又ゆり子に「丹」と名くる一匹の飼犬あり。好く其主に狎れ、主の意を解しぬ、ゆり子が煎餅の一片を以て「丹」を呼び「いざ立つておいで」と云へば、「丹殿」は畏こまりつゝ、後足にて起ち上り前足を手の如く揚げ、ヒヨコ〳〵とゆり子が前まで、轉ふヿなく歩み來り、飛び上りて其煎餅の褒美を頂戴するなり。

されどゆり子は、犬よりも多く猫を好める樣なりき。かの女は初め一匹の親猫を持ちたるが

その一匹の親猫は、ゆり子に三四の子猫を殘しぬ。三四の中にて「玉」が一番の粋なりし。「玉子」は全身黒くして、鼻の先の白き、可愛ゆき子猫なりき。ゆり子が始て「玉」に頸鈴をかけ與へし時「玉」は其頸鈴を取らんと、面白き鈴の音を追ひて、朝から晩まで駈け回りき。一日、ゆり子は、感冒を病み非常の發熱、三日ばかりも退かざりしかば、母は二三夜通夜して、少しの間休まんと、其間余自身、彼女の母に代りて看病しつゝいたくゆり子が爲に心配してありし時、戸のキーと軋りつゝ少しつゝ開くを見たり。やがて二三寸も開くと見れば、「玉」はいつしか入り來り、余が前を通りて、ゆり子の病床にすゝみぬ。「玉」は恰もその少き主人の病みたるを知りたらんものゝ如く「ニャーウ」と小さき哀れなる聲を發して、ソートゆり子が枕元に這ひよりぬ。ゆり子は僅かに目を開きつゝ「玉」を見てホヨリと笑ひて涙うかめ「若し自分が死ぬのならば、「玉」に何か遺してゆきたし」と云ひぬ。あはれなる子よ。彼女は死ぬと思ひしならん。余はゆり子を慰めて、御身は死せず、御身が病、明日屹度癒ゆへしと、力つけしに、ゆり子は其夜熟睡して、翌日余が云ひし如く癒へたり。されど心配なりし其夜の事を思ふ度に、可憐なる「玉」を思ひ起さぬとはあらず。」

「きじ」は「玉」の兄なりき。其毛色雉子の羽色に似たるが故に「きじ」とは呼ばれぬ。この「きじ太郎」中々の元氣ものなりき。余は履戸の柱に立かゝり凄まじき音を立てゝ爪とぐ渠を見たり。一日余は渠が應接間に於て、掛時計の搖錘を弄はんと鈎の如き爪もて、玻璃の羽目板を爬きつゝあるを見たり。渠は誰も居ざりしと思ひしならん、然れども後に立ちたる余のいかめしき髭

面の玻璃面に映せしや否、梟は愕くりして飛び出でぬ。暫くして梟は庭に歸へり來り、キョロ〱と塀に攀ぢ、其頂上に登つて、風に吹かれて目前に翻へる木葉を捕へ初めぬ。そは秋の日なりければ木葉は雨の降る如くふりつゝあり「きじ」が恰も「丹」が後足にて歩く時の如く立ち上つて、目の前に散りくるものを、一葉一葉捕ふる樣、中々に面白かりき。

玉」と「きじ」とが斯く可憐なるに引きかへ、一番兄なる「斑」は兄にも似はぬ惡戯兒なりき。梟は既に鼠を捕ふる齢に達したるが、梟は鼠を捕ふる度に憚りもなく坐敷にて食ひ淸く拭かれし床の間を汚がす癖あり。梟は又た鼠を捕ふるのみならず、多くの憐れなる小き生物を捕らふ」蝶、蟷螂、蚱蜢、乃至小鳥の類、梟が爲に生命を失ふもの少なからず梟は又其の技倆を人に示すべく其哀れなる獲物を家の内に嚙へ來る、厭ふべき習慣を有てり。かくして梟は一度甚だしく其主人を恐怖せしめし事あり今其子細を子達に語らん。

さてもゆり子は、一羽の美なるこま鳥を有ちたり。かの女はその鳥を籠には飼はざりしかど、寒き冬の朝な〱臺所の窓の外なる一葉樹に來て鳴きければ、馴れ〱て、はや手飼同然いつもその一葉樹に栖つて、ゆり子が窓の閾の上に、餌の一片を置くまでは、去りやらずして歌ふなりき。かゝりしほどに、鳥はいつしか窓の閾に來て栖まる樣になりけり。ある朝例の如くこま鳥が餌に飽きて、窓にて面白く囀づり居るを、惡猫の「斑」物蔭より、躍り出でゝ、唯一口に嚙み殺し、ポッ〱生血の滴るものを高慢らしく坐敷の爐邊に持ち來り、我等の團欒の前に置

きたり。

此の重罪の爲め、「班」は終身放逐の刑に處せられ、軈て渠を處望し居りしある農家の娘の許に遣られぬ。然れども渠は猶ほ懲りざるところか、惡戯愈増長せり。ある時ゆり子と母と用事ありて「班」が遣られし家の前を過ぎし時「班」の主なる娘が、其指を紙片にて卷けるを見て、其理由を問ひしに、案の如く「班」が引爬きたるにてありしと。其後「班」は、久しく其家に居ると能はず、肆いまゝに元の家に歸り來りぬ。されど渠を厄介者とし見るほか、誰も渠を愛する者なかりき。

ゆり子は又面白き馬の子を有ちたり。コハ其の父が先つ頃馬商人に買ひしものにて、渠は面しろき藝を敎へられたりき。そは誰にても渠に向ひて、汝は一週間に幾日働くぞと尋ねたらんには、彼は其前足の一つをあげて六度地上を打つなるべし、又さらば汝は幾日休むぞと問はゞ、唯一度うつべし。猶ほ問を變へて、さらば汝は幾日休むとを好むやと問はゞ、渠は六度うつなるべし。何と面白き馬にあらずや。さればゆり子は、新しき友を得る毎に、渠を見せ、渠に例の質問を試みて、其友を笑はしむるを例としぬ。

余は嘗にゆり子の親戚、誠、富雄の事を話したり、渠等の父はゆり子が伯父にして、其家はもと大名屋敷と呼び、國の大名の別莊なりしかば、其屋敷は甚だ廣く、大なる花園もあり、運動場もあり、孔雀の畜はれし庭もありき。余とゆり子と、或日此家を訪ひし時知らざる紳士と、貴婦人と孔雀を見居りき。ゆり子が「丁度孔雀の樣に威張つて」と余に囁きし時、渠等は此方を眺めた

り。我等は知らざる風をなして、森の方面に向ひ、其廣き胸を天に開ける、湖の傍に出でたり。湖には白く美しき四羽の鵞あつて、水際に浮びたり。渠等が穏かなる水面に飛びこむ時、一時に泡たつ白玉は、殆ど吹雪の如く美しく、其の靜かなる波を分ちて泅きゆく時は水の中にも鵞あつて一處に游べるかと見えぬ。ゆり子を見て鵞殿皆齊しくかの女が立てる岸に寄り來ぬ。ゆり子は餌を持ちて來ざりしを悔ひ、午後に必ず持ち來るべしと豫約して僅に渠等をば去らしめぬ。

我等が此處を立ち去らんと、身を回せし時、我等は湖の最も遙かなる端に、鴨に石を投げつゝ、遊び樂しむ二人の小兒を見たり。その一人は、ゆり子の從兄富雄なりき。我等が渠等を認めて、其方に進まんとせし時、渠等は一齊に逃げ去りぬ。

我等は渠等が立ちたりし處に達したりしが、其時茂れる蘆葦の間に、「クツ、クツ、クツ」と洩るゝ聲を聞きしかば、岸に下り蘆を推し分けて訪ひ見しに、哀れなる哉一羽の鴨、石に打れしものと見え、翼を傷め足を折られて、悲鳴しつゝ居る處なりき。親切なる我がゆり子は、可愛相にと、白き纖き手を延べて、怖ちながら遁げ得ざる鴨を胸に懷きぬ。

湖を離れて花海立ち靡ける野中に、一軒の古き茅家見えたり。これは六藏と呼ぶ村の獵師の家なりけり。六藏は昔し一たび若かりしが、今は老ひたり、其の若かりし時、ゆり子の伯父と父とに釣ると、射るとを敎へたりしが老ても猶は老耄せず、誠と富雄に、一層進歩したる釣術

と射獵を敎へぬ。渠は獵る時の外、常に毛皮頭巾を蒙りしかば、人の皆其頭巾に由つて渠を知るなり。渠は啻に動物を殺すとを知るのみならず、又之を活す所以を知れり。我は物識なりと自ら思ふらしき渠が容貌を見よ。

余とゆり子と傷める鴨を懷きて、渠を其家に訪ひし時、例の毛皮頭巾を蒙りて、戸外に網繕ろひ居りし渠は、余等を見て先づ其笑を笑ひき。我等か智慧假るべく來れりと看取たればならん。ゆり子が其怪我人を渠が前に置て、其療治を乞ひし時、渠は鴨を掌にのせて見「これは寧ろ食ふ方よからん、好く肥えて實澤山なり」と云ひつゝ、ゆり子が何と答ふかを試みぬ。渠はゆり子が其病人の爲に悲しく請ふて止まざるを見て、さらばとて其の療治を受けあひぬ。三日の後、ゆり子が再び湖を訪ひし時、鴨は既に傷より癒へて、他の仲間と樂しく遊び、しかも孰れが其時の病人なりしかを見分け難きほど幸なりし時、かの女の喜は如何なりしよ。

さりながらゆり子が交際は、鳥や獸ばかりでなく、かの女はまたすべて近處の小作人の翁や、媼や、小女たちを知りぬ。是等については、話すべき事澤山なれど、大分時間も過ぎたれば、其の一つ二つを語りて止まん。

ゆり子が邸の裏門から見へたる畠中の茅屋に、一人の老人住めり。かれは村中一番の年よりにて、ゆり子か祖父よりは、十歲ほども老いたりと云へり。されば渠は殆ど九十以上なるべく、腰も足も生れつきの如く曲り、白髮の頭に、捩りて拔くべき一筋の黑毛もなし。さて此老人、中

々に奇態の翁にて、斯く老ひて不自由なるも、獨り住居を好み、其の媼は久しき前に世を去りかの女が渠に殘せる數多の子等は皆其父の天井を出で、餘所から老たる親を養へば、老人は意のまゝに、寂しき小屋に唯一人居住ひ、人の迷惑にもならず、人にも迷惑をかけず、人は人、我は我にて、靜かに殘る日を送れり。此老人もゆり子の友にて、冬の日、戶の外に日向ぼこりして居る時、出で來るゆり子を見れば、話して聞かすとて、萎ひれたる手にて招くを常とす。渠が譚はいつとても中年の時の事にて、渠は餘り多く年を經て、少年の事は悉皆忘れたるものゝ如くなりき。

ある日村の會堂にて、小作人の息子が、小作人の娘を娶るとていと樂しき婚禮ありけり。處のものは皆會堂に集つて新しき夫婦を祝ひき。其時、例の老人も杖にすがつて出で來りしが、大勢の人を避けて、一人墓石に腰かけ居たり。其時余とゆり子と、渠に語りて、如何に目出度き祝儀ならずやと問ひしに、渠はいと冷かに六十年前、乃公が媼を貰つた頃は、一つ家に皆寄つて、高砂なんど賑かに歌つたものだに、此節では說敎所に持ちこんで、やれ鐘だの、やれ讃美歌だの祈禱だのと、目出度婚禮だのに、葬式でもする樣だと答へしかば「いやな人だよ此の人は」とゆり子は笑ひぬ。さればこれはゆり子が惡かりき。世に後れて、昔を慕ひ今を嫌ふは老人の常なれば強ち咎むべきにあらず。

渠も亦小兒を喜び、小兒の群が渠を見つくる時は、煩さき程に渠のまはりに聚へども、渠は少

しも慵さがらず。誰にも一樣に滿足を與へぬ。老人と小兒とは餘つぽど合つたる中と見ゆ。

こゝにまた憐れなる話あり。此老人の隣家に、此間まで一人の少女ありけり。——左樣、今は死したれば。——歳より云へば、ゆり子はかの女に二歳劣りの妹なれど、かの女のゆり子を姉の如くに敬ひいつくしみぬ。かの女は幸なくして身躰弱く、不具足なりければ、杖に賴りて歩きぬ。母は早くより亡くなりて、親とては父一人なりしかば、猶ほ更に不便なりき。學校には通ひたりしも、それも久しからずして退り、不自由ながら母の代りに臺所の事を務めぬ。かくあはれなる身なりしかば、友達と出て遊ぶことも出來ず、友達とて所帶じみたるかの女と遊ぶことを好まざれば、折々訪ひくるゆり子の外に、今は友とてもなかりき。ゆり子は何故かかの女を兄弟の樣に愛し。かの女久しく病みてありしかば屢々見舞ひ折々は自分の花園より、美しき香よき花など折りて、かの女の室に薫らしぬ。一日ゆり子はかの女の徒然を慰めんと、一箱の畫艸紙を贈りぬ。是はかの女に取りて、如何ばかりの喜なりけん。毎日毎日、彼よみ、此よみ同じものを幾度となく繰り返して讀みぬ。殊に聖書の面白き畫解を見る時は、全く病氣を忘るゝほどなりき。其後一日かの女が、本讀みさして眠らんとする時、開け放ちたる窓に、鳥の羽たゝく音聞え何ぞと見れば、ゆり子が手飼の白鳩一羽、窓に來て栖れるなりき。やがてゆり子が來りし時に、彼の女は鳩の事をゆり子に告げ、猶ほ其鳩が、天國に來よと招く神の靈の樣に見えたることを語りぬ。其日より病重り、數日にして彼女は逝き、會堂の墓所の片隅に葬むられ

ぬ、其上には十字架立てられ、花も撒かれぬ。十歳までかの女を育てて彼女に逝かれし父は、毎日かの女の墓に往いて泣きぬ。

かの女の死にし時、ゆり子は悲しさに、食事もせず本も讀まず、唯泣てのみ居たりき。されど彼女が、今美しき天國にあつて幸なることと、天國に再びかの女に逢はるゝことを説き聞かされて、始めて心を慰め。老ひて望なき彼女の父の爲に幸福を與へ玉へと、額き頭をふせて神に祈りぬ。

許し玉へ、話は哀れつぽくなりぬ。我等はゆり子がふる里に甚だ時を費しぬ。話はこゝに盡されど、今日は是にて終りとすべし。





との馬鹿

嵯峨のや主人

武藏の多摩川といふは、秩父山の清水、滴々集りて水源となり、麓に降るに及びて、流れて一帶の河となッて、東品川の海に入るものをいふので、水清く、流淺く、底の砂石も數へらるゝ斗、兩岸も、西方は一面丘陵起伏して、春は綠、夏は紅葉の色美しく、東方は一帶武藏野ケ原の名殘著しく、平野十里に連なッて、遠村近落の眺、最長閑で有ます。

下流に双子の渡といふ渡があるが、是は昔宗祇法師が、杖を東路に曳た時、「東路の丸子の里にゆきかゝり足も休めず急ぐ暮哉」と咏だ其丸子の渡より上一里、東都の西郊目黑より、相州厚木の方へ通ふ街道に有る渡で。此渡より都に近き事半里餘り、衾村といふ

一個の村があるが、此は昔は瀨田ケ谷の城主、吉良正忠の領地で有たといふ事で。此村何で私の記臆に殘て居るの歟といふと、其は此村が、大根竹の子の名產地だからといふ理でもなく、又此村には不思議にも天刑病人が多いからといふ譯でもなく、唯此村の片邊の、常專寺といふ寺の境內に、私の乳母が住んで居たからで有ます。

此寺見た所は有ふれた田舍寺で、昔は足利の一族たる、吉良家の菩提所で有たといふ丈、丸に二式雨の定紋を用ゆるの外、何の仔細もないが。唯一ツ此に人の注意を惹のは、遊次といふ極めて愚の性質の男、とお染といふ極めて不器量の娘の居るとで有ます。然し馬鹿も不器量も世間には澤山あるもの、其に不思議を立てる譯もないが、其處には又底の理有て、上からは知ぬが浮世、實際には想像以外の事が澤山有るもので。其想像以外の事が、即ち此話の種で、然しまあ順序を追ふて話す事にしませう。

恰度正月二日の事でした、世にある人は綺羅を飾ッて、何の苦勞心配もなく、浮世は何時迄も我物といふ貌で、都徃路をぞめき步くのを、別段羨むといふ理もないが、貧しい身の我には、見てから面白くもない、まして其中へ交りて遊ぶのは尙更、寧此一月は、田舍にくすぶッて居た方が宜らう、と二日の朝日東に登る頃、雜着を祝ふと其儘、下宿を飛出しました。

落ぶれて袖に涙のかゝる時人の心の奥ぞ知らるゝ」といふ歌の通り、今零落の我身を、

思てくれる人も無い簪ながら、我を育てた乳母が亭主と二人、本郷追分に借家住居して、亭主が老の痩腕に人力車を牽ば、其身は濯洗濯の片手間、飴菓子を賣て、世にふるは更に時雨の宿、幽な煙を立て居たが。去年の春亭主に先だたれてより、其住居もなり難ければ、此暮故鄕衾村に歸て、常專寺の境內なる茅屋に住よしを聞き、先づ其元を訪づれました。

來て見れば、六疊一間切の荒巢堂、一隅に骨を温める三尺の爐が切て有て、其前には昔ながらの黑塗の女箪笥が一重、之は今の身になッても、流石に手放すのは惜ければ、賣ずに持て居るので、上に小さな佛壇が有て、其中に見ゆる新しい位牌は、乳母が此月頃の涙の種、慥に亡老爺の牌名で有ませう。毎朝願にかけて供るお茶湯も、今日はまだ朝供たまゝ下ぬものと見えて、小さな藍色の佛器が其前に供へて有ます。

元より天井もなき白屋なれば、仰げば萱葺の家根裏も見えて、煤だらけな梁からは、蜘蛛の巢の糸が、散かゝッた藁塵をかけたまゝ垂かゝり。荒壁の隙間を洩れて、木枯のうそ寒さうに吹込むのを、筵屏風でせきとめては有るが、其も夜半には冷渡りて、寢覺の夢を驚かすで有らう、といとゞ哀にも思はれます。

又二間餘りの土間の方を見れば、片隅には山の如く柴薪木を積重ねて、其前には目籠が轉がされて有り、傍の土だらけな目笊の中には、土だらけの大根、胡蘿蔔、冬葱などが、

取交て打込まれて有るが、椽の下より吹上る風の寒ければ、土間の土さへ自づからじめじめとして居て、四下の物も何處となく氷れる如く、見るから心もかじけさうです。然し戶外の天地は廣々として居て、天の色さへ一入清く、杉の梢、松の綠も、此頃の風雨霜雪と戰て、幾分の辛酸は嘗ながらも、尙其特色を替ず、吹寄するならひ風に嚴冬の寒さを訴へて居れば、麥の穗の二三寸延た圃に、小雀のちよ〳〵と囀りながら飛廻はるも愛らしく。茶の木の根方より、何の影に驚て歟、不意に飛立た雉の姿も物珍らしく。霜を結ぶ枯野の海、葉の散果た庭の枯柳、裸躰になッた楢の林、其木の下の草の蓬々、不破の關かとも思はれるが、其も自然の眺なれば、せゝこましい都の住居とは違ッて、造化の懷に居る樣な氣、心は何時となく延々として來ます。

斯て入相の鐘鳴て、野も圃も一色に暮ゆけば、雨戶を其まゝ引て、豆ランプに火を點じ、火爐に柴を惜氣もなく打くべて、私が一方にあぐらを組めば、乳母は向ひに立膝をして、木枯の時雨を相の手に、語るも聞くも昔話、亡父母の事言出しては、其面影のなつかしく、覺えず知らず袂を濡す、此處も淚の浮世では有ません歟。

焚火に身はぽか〳〵として、冬を知らぬ程に溫く、手足ものび〳〵としながら、切打くべた松葉、枯枝、栗の刺、種々の柴の烟室内に滿ちて、四下の物を霞籠る有樣、如何なる山奧の住居かとも思はれる斗。昨日は花の都に新年を迎へ、今日は寂しき衾の里に世

を佗て、梢の嵐を軒の時雨かと聞身の心細さ。之も浮世と思ふ耳元に、ねよとの鐘の音、鐺々と小夜を告渡れば、談話は又明日の事として床へ入ました。

斯て翌日は朝飯を濟して後、我は運動にとて戸外へ出ました。七八間ゆきて寺の傍を過る時、ふと見れば。七十斗の老人の、頭の髪は雪を戴き、腮の髯は銀の針を植たるか、様に出て貌を洗ふて居ました。彼は有髪ながら當寺の住僧で、私が默禮したら彼も默禮したが、其面影は有無しに痩衰へ、足下もよぼ〳〵として、立居も危い程で有ました。」

庫裡の傍を通りて、本堂の前へ來た時見れば。此處には年頃三十五六の、でッぷりと太ッた男、玄關前の日向に幾枚の筵を敷のべて、麥の搗たのを干て居ました。如何様彼は寺男と見えて、身には古びたどんつくをまとひ、高く端折た裾から見える、針目の繁き股引きたならしく、草鞋穿で働ては居たが、眉濃く、目滑しく、柔和の相面に現はれて、如何にも眞率らしく見えました。

玄關には其年廿三四の女、一ぱいにさし入る日向を受て、布子の破裂を繼物の手業繁く、縫針に餘念もない様子でした。彼女は世にも稀らしい不器量で、否不器量と言へば不器量、或は美人と見る人が有る歟も知れぬは。額格外に高く、兩の頬格外にふッくりとして、鼻格外に小さく、口元に格外の愛敬匂ひ溢れて、色白く、眦格外に下ッて、世にいふお龜面ちといふ貌でした。

田舍の働き我目には珍らしければ、何の氣もなく立て見て居る折しも、庫裡よりずッと出て來た六十ヨの老女、何が心にさわッた事やら、件の寺男を見るより。「やい遊次、何故人が呼に返事をしねへのだ、此馬鹿は。此頃は横着になりやがッて、一度で返事をした例が有はしねへ、何故左樣だ、覺えて居ろ此馬鹿は！」と言ひながら壁に立掛て有た竹の棒取るが早く、男の頭を續け樣に、咄嗟五ッ六ッひッぱたいたが、其形相の邪見さ。眼中ぎよろりとして鋭く、眉目の間に現はれた、一種異樣の青筋は、脈の如くびく／＼と脉打て居たが、此は心のいら／＼とする人の癖で。其威權の大なるを見れば、寺の妻君で有ませう。

然し寺男は露逆らう樣子もなく、又頭を舉て老女の貌さへも見ず、又何の言譯もせず、恰も汝の打にまかすといふ風で、委細かまはず麥を干て居ました。

縫物に餘念のなかッた玄關の女は、此聲に驚て此方をふり向き、さもいたはし氣に男の方を見て居たが、又恨めしさうにじいとヨ、老女の貌を見詰て居ました。

老女は愈息まき荒く、「此馬鹿は、何だッて昨日干た麥を又出して干のだ。馬鹿じやねへかのうー　其よりは早く山へ徃て焚木を拾て來い。昨夜の風で落たらう、拾はなければ皆外の人が來て拾てしまはゐ。後でする事を先へして、先へする事を後でして居やがらゐ、此馬鹿はー　麥は宜から、さッさと徃て拾て來うー」と罵りました。

此時男はやう／＼頭を擧て、「山ッて、裏の歟、前の歟？」と尋ねました。「兩方のよ、骨惜みを爲やがッて。さッさと往て來い。ぐづ／＼爲やがると、叉叩きくぢくぜ」と罵られて。おいと言ひながら、庫裡より大きな目籠をかたげ出し、其を背中に背負ふと、門外をさして出て往ました。彼は其躰の確りとして居るには似ず、足元は如何にも定まらず、いちかり股で、よた／＼と歩て往ました。

老女はジッと其後影を見送て居たが、やがて玄關に居る女の方に向て、「眞成に馬鹿ッて者は仕方の無者だのう、一寸も目が離されやあ爲ねへ」と言ひました。然し女は何とも返事はせず、唯苦笑をした斗でした。

私は餘の事に呆れ果て、如何に給金を出して置傭人だとて、もう是三十を越た大の男を、小兒でも切諌する樣に打擲するとは。如何に物を知らぬ田舍の老婆だとて、人間の尊い事は知て居らうに。如何に彼男は愚だとて、愚なればいたわッて使てやらねばならぬに、と餘りの事に呆れ果て、茫然として見て居たが、此に及びて彼寺男の後を追て、私も門外へ遊びに出ました。

葷酒不許入山門と記された立石を、左に見ながら門を出づれば、此馬鹿と罵られた彼男は右手の森の中に在て、目籠を地上におろしたまゝ、何の意味も、何の考も、何の感じも無さゝうな貌で、平然として枯枝を拾て居ました。嗚呼彼は如何なる運命の手に捕は

れたれば、斯る物寂しい田舍寺で、奴隷の如く追使はれるので有らう？ 彼には親も兄弟も無ので有らう歟？、と坐ろに哀にも思はれました。然く問慰むべき間でも無き故、私は其まゝ打棄て往還へ出ました。立て前面を見れば、田は氷の鏡を張り、畔の枯草は霜を結んで、宛然雪のふれる如く。野分の朝より、次第〳〵に裸躰になッた楢林の上から、日は花やかに輝き昇ッて、地上の萬象を温に照せば、彼方の岡の圃の霜は、其光に照されて解かゝり、早白やかの蒸發氣となッて立昇ッて居ます。

行て小川の邊を過れば、朝風面を拂て身に冷々と染み、心さへ澄渡る心地よさ、足音に驚いて飛上ッた二三羽の雀、四五間先の薄の穂に止まれば、薄は其重さに堪ず、斜にしなッて地に倒れかゝります。雀は尚留らんとしたが留る事出來ず、飛ばんとしたが足留無れば、薄のしなひゆく間、翼をぶる〳〵と震はして居たが、やがて薄が地につくや否、又飛翔ッて、更に二三間先の小草の上に降上ち、日光の影を喜ぶ如く、ちよ〳〵鳴ながら餌を求食て居ます。

行てある家の前を過れば、收納場の一方で、主人が麥を搗傍に、四五人の小兒が遊んで居るが、其雨頰の眞赤になッて居るのは、此寒風に吹さらされた上を、掌でこすッたもので有らう歟？ 日當りのよき椽側には、霜を戴く白髮の老女が、末の孫娘を膝の上に

抱へて、傍の猫と共に日向ぼこりをして居ます。

彼方の杉の生垣の陰から、煙の斜に立昇るのを何歟と見れば。二三人の若い男が焚火しながら、誰に遠慮もない無禮講、衣服の裾をまくッて、股引の破れの出て居るにも管はず、悠々然と温て居るので。其世間係はぬ高話は、何事で有るか聞取れぬながら、恐らく新田の虎が花嫁子の噂歟、其でなければ村會議員撰擧の噂歟、其でなければ日待の夜に、太郎作の妻が夫の目を窃んで、背戸の銀次とちゝくりの不埒、亭主が知らぬといふ噂でゝも有ませう。

此家に添ふて坂を降り、四六時中休む事のない、勉强の水車小屋を左に見て、更に向ひの坂を登りゆけば、上に小さな堂が在ました。

主人を誰かと覗て見たれば。地獄の大王閻魔殿、兩眼を善惡の鏡の樣に光らせ、嚴然として中央に坐て居り、左右に從ふ十王は、粛々然として其命を待ち、又一隅には三津川の婆が、此寒いのに片肌脱で、立膝をしながら搆へて居ました。王が帳前の花瓶には、浮世の誰が信仰で、何時頃あげたもので有らう歟、いろ〳〵の草花が萎れたまゝ見えるが、おさ〳〵世の無常を示し貌です。

堂前に立て坂下を見れば、竹藪村の一方を圍んで、水車の音物寂しく。遥の天の一方には、函根山一帶の翠を積み、其上には白雪の芙蓉峯、薄衣をかついだビイナイの女神の

如く、巍々として天に聳へて居ます。

行こと一二丁、路傍に、右碑文谷、左丸子と彫附た標石の立てる所より、右に曲て小徑をゆけば、霜柱に持擧られた土の、歩く度足の下で、ごぼ〳〵と鳴る氣味のわるさ、彼方の榛木の並木路を、盲縞の股引を穿き、盲縞の綿子を着た農夫が、毫鋒頭巾で朝風を凌ぎながら、空車を牽てゆくが、轢る音さへ寒さうなれば、目に入る景色に自然の美は有ながら、花咲春には異なッて、一村何處となく物寂しくありました。

私は一運動して歸りました。寺の前へ來た時森の中を見れば、例の此馬鹿殿は、倚何の意味もなく、何の考もなく、何の感もなき貌附で、平氣で柴を拾ッて居ました門を入て玄關の方を見れば、最前の細目命は、今倚縫物をして居たが、其前の土間を廿四五の若い僧一人、奇麗な空色の衣服を着て、妻皮の懸ッた高足駄を穿たのが、何故ともなくぶら〳〵として居たが、是は恐らく長老で有ませう。此時傍の鐘突堂の影から、不意に一疋の黒犬が飛出し、我を見て大に吠かゝるのを、僧は笑ひながら之を叱り、我を迎へて默禮しました。

私は此僧を一目見て、呆然として驚きました、何故なら彼の容貌、此馬鹿殿によく似て居たから。其は他人の空似といふの歟？空似にしては餘りによく似た。唯異なる所は、寺男の面には、重に柔和温厚の德現はれ、此僧の面には、重に剛强不屈の風ある、此一

點の違ふ斗。目元といひ、鼻附といひ、口元といひ、如何樣によく似て居ましたらう—私は不思議に堪ませんでした。

歸て乳母に一什を語り、寺の樣子を聞たれば、扨も話の多い事よ。住持といふは、今こそ楳干の樣なしなびた老爺だが、あれでも花の盛の若い時には、鶯を啼せた事も有た色男、打、と買ふ、と呑む、といふ三駄羅煩惱に身を持崩して、色道の譯知、すいも、甘いも、咀分た通人ださうで。して又今の妻といふは、此玉川向ふの溝口驛で、泊客の機嫌とる笊蕎麥といふのをして居たのを、ふと和尙が買馴染だより、女の方から熱くなッて、終に夫婦になッたのださうで。然し女は至ッて好色の質で、此處へ嫁してからも、泥水稼業の本性失せず、幾人となく色男を拵らへたので、和尙もとう〳〵氣を狂はして、古井へ身を投た事も有ッたさうで。

又二人は此樣な者ながら、取得は人の世話をするのが好で、あのお龜の樣な面の染といふ娘も、あの大事がッて育てる長老も、皆少さい時貰て育てたのださうで、あの馬鹿の遊次といふのも、あの通り牛馬歟何ぞの樣に追使ッては居るが、彼で下男ではない貰ひッ子ださうで、あれはある時、年も暮ゆく師走の末、折しも朝より雪のふり積ッた夕暮、おさな子を伴た順禮の夫婦が、道にゆき惱みて此寺を賴み、一夜の宿を借たのが緣で、其子を寺にくれて立去ッた、其が即ち今の遊次で、少さい時には馬鹿でも無ッたが、十

二三の時に大わづらひをして、其からあの樣な馬鹿になッたのださうで。總て是等の話を、乳母は元より能辯なれば、滔々と語て聞せました。して見れば彼等は兄弟ではないのか？ 然し乳母だとて此處へは此頃來たもの、深い樣子を知らう筈がない。其は世に空似といふ事のないでは無が、空似にしては餘りによく似て居る。或は疑ふ、二人は元々兄弟ながら、何か其處にはいふに言はれぬ理が有て、あの通り他人で暮て居るのでは無らう歟？ 左樣言へば此先の多摩川の渡を双子といふが、其名が兄弟に緣のあるのも不思議だ、と有らぬ事迄聯感となッて、終には心の底の奥の方で、一種の疑念が、是には何歟秘密が有るのだらう、とさゝやく樣にむづつき始めました。

其より後は、別に氣に止めるといふ譯でもないが、私は此馬鹿殿の貌を見る度、其相に少しも馬鹿らしい所なく、却て伶俐の相あるに不審晴ず。愈之には秘密が有るらしい、と疑を入れゝば入る程、顏の愚鈍、僞りの愚歟、と何時となく氣にかゝる樣になりました。然し彼は朝から晩迄、唯默々としてくれ〳〵と働て居る斗、用事の外何の話も爲た事なく、其もむづ〳〵口の内で言て居る程の事、其故話では智愚を知る事も出來ず、唯其働き振に據て、僅に判斷を下す斗です。

一日戸外をぶら〳〵と步きながら、徃ともなし物置の前へ出た時、ふと見れば例の此馬

鹿殿は、輝く日光に照されて、額に露の玉の汗、じく〳〵滲らせながら、頻りに米を搗て居ました。暫らく立て見て居る中、彼の米を搗のを廢て、物置から一枚の蓆を持出たし、其を草葺家根の簷にかけやうとしました。如何樣是は日よけを爲やうと思ふたのでせう。彼は蓆の端を家根へ引かけて見たが、手を離せば、蓆はずる〳〵とすべり落るので、扨困ッたといふ躰で、暫らく考へて居たが、ふと何歟思ひ當る事の有ると見え、蓆を其處へ投出したまゝ、急で裏手の方へ往ました。

何の爲めに往たかな、と佇立去らず待て居る中、やがて又歸て來たが、見れば一張の階子をかつぎ出して來ました。如何するの歟と思ッて見て居る、と階子を屋根へ投かけて、其段へ蓆の端を引かけました。然し蓆は前の通りすべり落るので、又困ッたといふ躰で考へて居たが。今度は一本の竿竹を持出し、其端へ蓆を突かけて、程よき所に之れを立て、日除の具合を一寸見て、愈よいと思ッたもの歟、今度は之を地へ突込みました。然し手を放すと蓆の重みで、竿竹は其まゝ倒れて仕舞ひます。彼は蓆を持たまゝ呆れたといふ躰で、一寸私の貌を見て、莞爾と靜に微笑たが、終に斷念たといふ躰で、とう〳〵蓆を投棄て、又よッこらよッこらと米を搗始ました。彼は誠の馬鹿で有ませう歟?

一日朝日花やかに輝く十時頃、馬鹿殿のそ〳〵と乳母の家へやッて來ました、無心で敷居を跨うとした時、其處に日向ぼこりをして居た猫が、人影に驚て喵嚌飛出したので、

彼はびくりとして足を止めたが、乳母と目を見合せて莞爾と笑ひながら、其まゝ這入て來て「伯母樣、母ちやんが此香物をあげやうッて。」乳母は小桶を受取て。「おや澤山だね、是は有難う、是は大層好色だ。」と言ひながら其を蓋物へあけ、宜しく巾しておくれといふて小桶を返せば、彼は又之れを抱へてよた〳〵と去りながら、傍に遊んで居る鷄を見て、其でッぷりと太ッた躰で、どし〳〵と歩きながら地響を打せ、其ばッと斗二三間飛退たのを見て、にこにこ笑ひながら徃て仕舞ひました。

一日又諸所を運動した後、ふと例の物置の此方へ出たが、と見れば此馬鹿、例の細目命と差向ひで、麥を引割にせうと碓を引て居ました。何歟面白い事の有るものと見え、莞爾々々笑ひながら話をして居たが、其時の容貌は、平常の何の意味も、何の考も、何の感もなさゝうな貌とは違ひ、何處となく花やぎ渡ッて、幸の滿てる樣子でした。不思議と思ふ中、やがて女は男の傍へすり寄り、靜其手を抓れば、男も手を擧て其背を打ました。然し私がぶら〳〵と其前へ來た時は、彼等はもう話を廢めて、眞地目な貌をして居ました。此馬鹿果して馬鹿なのでせう歟？私の心は愈疑念の雲で蓋はれました。

私は全躰空想に耽る質で、折々は人も來ぬ物靜な森の中を徘徊したり、或は破窓の下に端坐して、澄渡る天に向て夜の更るのを忘れたり、或は山陰の朽木に坐して、家路を忘れたりするのが癖だが、今日も此寺の裏山の、崖苔蒸て木根匍匐かゝり、自然奧深さう

に見ゆる洞の中、前に根笹繁り、上に杉の梢蓋かゝりて、横手に小さなさし掛小屋が有て、自然に風よけとなッて居る、其洞の中に入り、木根に腰打掛て、暮ゆく天を眺ながら、好な空想に耽て居ました。

間もなく日がとッぷりと暮果れば、星は燦然と天に光ながら、月なき夜の事とて、洞の中は眞闇で、最とも空想によき時となりました。折からばた〱といふ足音がして、ちら〱と人影が現はれた。誰歟と思て見て居る中、する〱と前のさし掛小屋へ這入ました。私は愕然として驚いた。此方は上には杉の梢暗く、下には根笹繁りて姿をかくせば、彼方より見える氣使はないが、此方より彼方は星明りで分る。今さし掛へ這入た人影は、正しく女で、然も例の細目命で有ました。何の爲めに今頃、此處へは來たので有らう？耳を引立たが、其後は別に音も爲ません、唯折々身動しをするものと見えて、ごそ〱といふ藁の音のする斗、四下は森として居ます。愈不思議だ。

夜といひ、山里といひ、寺といひ、四下の物一ッとして、人の想像を驚かせる媒でないものは有ません。此に至て今迄の空想は何處へやら、更に新しい想像が湧始て人の胸を波立せます。何歟今に目の前で、如何様珍事歟、起りでも爲さうに思はれて、物好の心がむづつきます。で息を殺し、身動しもせず、其珍事の起るのを待て居ました。

忽ち又人の足音が聞えて、眞黒な影が現はれた。瞳を定めて見れば、疑もなく遊次で、

私が此處に居るとも知らず、急ぎ足でさしかけへ這入りました。あゝ是だ。日頃の疑ひ、今夜は晴るゝぞ。私は息を殺して耳を引立ました。

忽ち小聲ながら女の聲で、

〳〵遊さん、御生だから私を、何處へでも宜から、何卒伴て行ておくれ。私はもうつく〳〵此處に居るのは嫌だから。

男の聲で、

其樣な事を言ては困るでは無歟。知ての通の譯だもの、我達が居なくッて見ねへな、あのよぼ〳〵した御祖父樣を、誰が世話をするな？其上如何樣な事になる歟知はしねへ、何時歟もあゝいふ事が有た位だもの。

女の聲で、

だッてお前考へて御覧な、此處に居ればこそ糞の樣にこきおろされるのではない歟？外へ往て御覧、立派な給金を取て勤められるよ。又お前だッてさうだね、毎日〳〵牛歟馬の樣に追使はれて、箸のあげおろしには叱り散され。其も宜が、三日にあげず打打擲だ。私は口惜しくッて口惜しくッてなりはしない。お前だッて男だらう？此處計日は照はしないやね、何處歟へ往て、二人共稼に暮さうではない歟。

覺えず聲が高くなるのを、男は叱と制して、又小聲で何歟低語始ました。私は耳を引立

たが、今度は充分注意しての小聲、一言隻句も聞えません。私は尚も洞を出て、小屋の傍へ忍びゆき、其話を窃み聞かう歟、と迄思ッたが、扨其丈は流石に恥て思ひ止まりました。

暫くして話聲が止む、と二人は別れ〲に小屋を出てゆきました。私は後影を見送つて、太い溜息を吐たが、其まゝ乳母の白屋へ歸りました。然し見た事に就ては何事も言はず、獨胸におさめて臥て仕舞ました

斯て其夜も明方頃、乳母が搖起すので目を覺せば、寺の庫裡に當て、何かは知らず、がやがやといふ人聲がかまびすしく聞えました。何事歟出來たの歟と聞けば、乳母は周章てた聲で、「大變が出來ましたよ。今お寺のお上樣が臥床で死で居て、氷の樣に冷たくなッて居るのに、遊次の馬鹿とお染の影とが、何處へ往た歟かいくれ見えないさうで、何でも不思議だ、變死に違ひないといふので、お寺は引繰復る樣な騷ですといふ。私は默して點頭た斗、衣服を改めて、直庫裡の方へ往て見ました。

庫裡には近隣の者二三十人集り、今しも一方は、郡役所と警察へ急報し、一方は手を分ちて、二人の行衛を四方に穿らうといふ所でした。如何樣嫌疑は。二人の者に懸て居るものと見えます。彼等の中には、或は土間の中央へ焚火をし、車坐になッて煖りながら、何歟やかましく罵て居るのも有れば、或は火鉢の周圍を取捲て、何歟小賢し氣に評議し

て居るのもあれば。或は竈の前に鼻を突合せて、何事を歟ひそ〳〵低語て居る者も有ました。是は五人組とでもいふ様な先に立つ者から、令の降るのを待て居るのでせう？見渡した所庫裡の中は、めちやどさくさの大騒でした。暫らくして若僧の長老と二人の年輩の農夫とが立擧ッて、一同に向て、「扨皆様、誠に如何も御苦勞様ですが、では何卒、一骨お折下さい、と言へば。一同の中から新田の五郎次といふ若衆、何事にも利口ぶッて、己でなくてはと口をきく男進み出で。「其はもう承知ですが、では誰が警察へ往て、誰〳〵が何處の方へ往といふのを定て下さいな。」といふ。年寄點頭て、「其では五郎次様、お前様御苦勞でも彌太様の父様と外に二三人の若方とで、警察の方へ往て下さい。又八五郎様、お前様は御氣の毒だが、熊さんや何歟と、双子溝口の方を穿して下さい。又誰々は何の方、誰〳〵は何れの方、と各其向ふ所を定めれば、何れも皆承知して、恰も面白半分といふ體で、灯燈を持て先へ立つも有れば、棒を突立て之に續も在て、がや〳〵、わや〳〵としながら出て往たが、後は恰で火の消へた様、寺内森としてしまひました。

其中夜も明れば、警官は醫師同導で出張して、死人の死骸を撿査して見たが、卒中の様な病氣で自然に死だもの歟、其とも人の手にかゝッて死だもの歟、其區別は判然しませんでした。何故なら縊り殺されたと歟、毒殺されたと歟いふ様な形跡は、露斗も無ッた

故、然し宵迄丈夫で居た者が、不意に臥床で死で居たといふのも怪しい事。其上男女二人、同時に姿をかくすといふのも怪しい極點。然も二人共尋常ならぬ者、男が古今の大馬鹿で、女が古今の大不器量、是がかけ落といふ洒落なれば、古今例のないかけ落で、何たるおどけたかけ落だんべい。と此騒動の中でも交かへす者さへあるおかしさ。何でも之には一大秘密が有るに疑ない、其秘密を知り、老婆の死の原因を知るのは、二人を探し出すの外途はない、と誰の考も其處へ附ます。で警察でも電報を以て非常線を全國に張り、二人の行衛を穿鑿する事となりました。

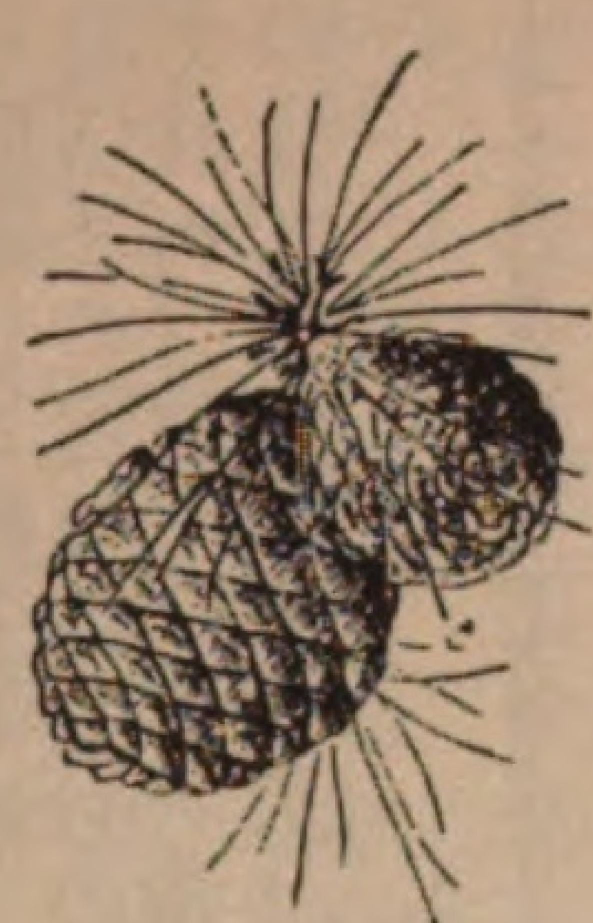
午後になッてから、四方へ穿鑿に出た者も、おひ〳〵勞足を引ずりながら歸て來たが、二人の影は、皆無見えぬとの事でした。然し彼等の組にてこそ分るまいが、警察法の非常に進歩した今日なれば、其中此手で穿し出されるで有らうと思ひ。其夜は一同本堂に集まッて、死人の通夜をしながらも、田舎者の呑氣は、誰憚らぬ高調子。今日の穿鑿には、予が一番骨を折たといふのを衆に知れんと思ッて歟、人の語の尻を折て、己の働き振を誇るも有れば。或は背戸の擔桶左衛門が大根圃で、蕪を枕におりんの女ちよを、占てくれたと自慢するも有れば。或は新田の羅七が稲田の水の引方がずるいので、去年は予が田の出來作がわるかッたと不平をいふもあれば。或は鐵店のお糸が愛敬に、村長の小旦那が魂を扱して、盛の附た犬の如く、毎晩入込んでふざけて居るだ、と語るも有りて。

にぎやかに一夜を送ッたが、翌日は佛を寺内の墓所へ葬りました。此様な事が有ても東京なら、世間が廣く、事が多いから、未だ三日も經ぬ中に、誰ももう忘れて仕舞ふのだが。其處がそれ此邊は草深い田舎の事、世間が狹く、事が少い故、此程の事も大珍事で、其當分は寄るとさわると、誰も彼も此噂計。今日は警察から。二人を捕へたといふ報知が懸る歟、明日は其知らせが在る歟、と村内一同待て居たが、正月の月も空しく過ゆけど、終に其知らせは有ませんでした。

二月の下旬、私は東京へ歸りました。歸て後は此事も全く忘れて居たが、其年の夏になッて、ふと乳母の事を思ひ出し、頻に忍ばれて止み難き故、之を尋ねた序に、彼二人の事をも尋ねたら、今に行衛が知れぬといふ事でした。彼等はそも何處へ往ましたらう?」ふり返れば二式兩の定紋は、今尚依然として常専寺の家根に光ては居るが、此馬鹿と罵た叫び聲も、もう此邊には再び聞えず、將亦此馬鹿の名を背負て居た男の姿も、再び此邊に影さへ見えぬとは、嗚呼是も又浮世では有ますまい歟！



明治廿五年九月十四日逓信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行